

第74回東北地区高等学校PTA連合会

仙台大会報告書

見つけよう 個を生かす時代のPTA活動
～一緒に探しませんか? 多様性の時代にできること～



令和7年

7.1^火 - 7.2^水

会場

仙台サンプラザホール

仙台サンプラザホテル

主催

東北地区高等学校PTA連合会

共催

一般社団法人全国高等学校PTA連合会

後援

宮城県教育委員会・仙台市教育委員会

宮城県高等学校長協会

公益財団法人日本教育公務員弘済会宮城支部

主管

宮城県高等学校PTA連合会

感謝

CONTENTS



01	目次	
02	大会フォトギャラリー	
03	仙台大会を終えて 大会実行委員長	瀧 口 愛 美
04	開催要項	
05	大会次第	
06	開会行事 開会あいさつ 大会会長 (一社)全国高等学校PTA連合会会長 来賓祝辞 宮城県教育庁副教育長(教育長代理) 仙台市教育委員会教育長 受賞者代表謝辞 福島県高等学校PTA連合会前会長	稲 垣 美 樹 田名部 智 之 遠 藤 秀 樹 天 野 元 鈴 木 健 児
07	基調講演 オーストラリア国立大学 教授	川 口 淳一郎 氏
08	研究協議 発表内容 質疑応答 指導助言	
09	閉会行事 次期開催県(秋田県)あいさつ	
10	大会参加報告・編集後記	

第74回東北地区高等学校PTA連合会

仙台大会 フォトギャラリー



情報交換会 7月1日(火) 仙台サンプラザホテル



● **司会**
富谷高校PTA会長
阿部 里恵

● **開会のことば**
大会実行委員長
瀧口 愛美

● **会長あいさつ**
大会会長
稲垣 美樹

● **祝辞**
宮城県教育庁副教育長
遠藤 秀樹



● **祝辞**
宮城県高等学校長協会会長
樽野 幸義





● 閉会のことば
大会実行副委員長
杉浦 誠





● **司会**
フリーアナウンサー
黒田 典子



● **開会宣言**
大会実行副委員長
加茂 祐一



「やれる理由こそが着想を生む」「はやふさ」「はやふさ2」を完遂させた力」
講師 オーストラリア国立大学教授 川口淳一郎氏

「見つけよう 個を生かす時代のPTA活動」
「一躍に躍りませんか？ 多様性の時代へ」



大会顧問
滝井 隆太
小金 聡
大会副会長
幕田 宙晃



● **歓迎のことば**
大会実行委員長
瀧口 愛美



● **あいさつ**
大会会長
稲垣 美樹



大会副会長
幕田 宙晃
大会副会長
工藤 健一
大会副会長
菊地 佐起子
大会副会長
木村 元恩



● **あいさつ**
全国高P連会長
田名部智之



● **祝辞**
宮城県教育庁副教育長
遠藤 秀樹



仙台市教育委員会
教育長
天野 元
宮城県高等学校
生徒会連合会
会長
樽野 浩
宮城県教育
生涯学習
課長
二浦 洋



● **祝辞**
仙台市教育委員会教育長
天野 元



● **来賓紹介**
大会実行副委員長
大関 友好



● 祝電披露
大会実行副委員長
佐藤 美香



● 表彰状受賞者代表
佐藤 敏明



● 感謝状受賞者代表
鈴木 健児



● 受賞者代表謝辞
鈴木 健児



● 閉会のことば
大会実行副委員長
佐々木 寛



● 広報紙コンクール最優秀校
青森県立五所川原農林高等学校



基調講演 「やれる理由こそが着想を生む ～「はやぶさ」、「はやぶさ2」を完遂させた力～」



● オーストラリア国立大学 教授
川口淳一郎 氏



宮城県大河原産業高等学校ギター一部



仙台育英学園高等学校チアリーディング部



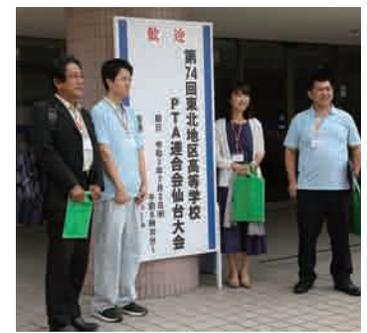
研究協議

「個々の力を生かすP T A活動とは」





● 閉会宣言
大会実行副委員長
佐々木 寛



大会スナップ(1)



大会スナップ(2)



大会スナップ(3)





仙台大会を終えて

大会実行委員長 瀧口 愛美

令和7年7月1日、2日の両日、仙台サンプラザホールにて開催された東北地区高等学校PTA連合会仙台大会は、「見つけよう 個を生かす時代のPTA活動 ～一緒に探しませんか？多様性の時代にできること～」というテーマのもと、大盛況のうちに幕を閉じました。東北6県から集まった1,000人を超える参加者の熱意が会場を満たし、この大会が持つ意義の大きさを肌で感じました。

大会が無事に終わることができましたこと、ご参加の皆様にご心より御礼申し上げます。

また、大会の開催にご尽力くださいました関係者の皆様、そして宮城県高等学校PTA会員の皆様に、改めて深く感謝いたします。

大会初日の夜を彩った情報交換会は、まさに東北の「共鳴の場」でした。日頃の活動事例交換に加え、宮城県の文化と交流を深めるための工夫が凝らされていたのです。

会場では、宮城の豊かな風土が育んだ地酒の披露があり、その香りとともに会話も弾み、参加者間の距離が一気に縮まりました。そして、交流のハイライトは、仙台の伝統を象徴する仙台すずめ踊りの発表です。躍動感あふれる軽快なリズムと、扇子を使った華麗な舞は、参加者全員の心をついにし、議論の場から解放された大きな感動と活力を与えてくれました。硬いテーマを扱う大会だからこそ、こうした文化的な体験を共有し、心を通わせる時間がいかに重要であるかを実感しました。

大会2日目は、宮城県大河原産業高等学校ギター部による心温まる演奏で幕を開けました。高校生の純粋で美しい音色が会場全体を包み込み、私たちPTAの活動の原点にある「生徒への想い」を改めて思い出させてくれました。

基調講演では、オーストラリア国立大学の川口淳一郎教授から、グローバルな視点に基づいた、これからの教育とPTAの関わり方について貴重な示唆をいただきました。現代社会の急速な変化、特にAI時代における「個の才能」の重要性を踏まえ、PTAが画一的な支援ではなく、「一人ひとりの生徒と保護者の個性をどう生かすか」という視点を持つことの必要性を強く感じました。

また、仙台育英学園高等学校チアリーディング部によるキラキラのある、活力に満ちた演技が披露されました。高校生たちの真摯に目標に向かう姿と、仲間と協調する力は、まさに私たちが育もうとしている「個を生かす力」そのものであり、大きな感動と元気をもらいました。

本大会の核心である研究協議では、「個々を生かすPTA活動とは」というテーマのもと、東北6県の代表校が日頃の活動の成果を力強く発表してくださいました。従来の「全員参加」「画一的な役割分担」という形に捉われず、得意な分野や時間的制約に応じた「ゆるやかな関わり」を許容するPTA運営の事例や、IT技術を活用して参加ハードルを下げる試みなど、多様性の時代に即した具体的な活動例に触れることができました。

この大会で得た最大の収穫は、「個を生かす」とは、生徒だけでなく、PTAを構成する保護者一人ひとりの個性と事情も生かすということだと気付かされたことです。得意なこと、できる範囲で貢献し合える、柔軟で風通しの良い組織へと進化していくこと。それが、多様な生徒と学校を支える力になると確信しました。

この仙台大会で共有した知見と熱意を、各県の活動に持ち帰り、未来を担う子どもたちのために、共に進化するPTA活動を力強く推進していくことを誓います。

第74回東北地区高等学校PTA連合会 仙台大会開催要項

- 1 期 日 令和7年7月1日(火)・2日(水)
- 2 会 場 仙台サンプラザホール・仙台サンプラザホテル
- 3 主 催 東北地区高等学校PTA連合会
- 4 共 催 一般社団法人全国高等学校PTA連合会
- 5 後 援 宮城県教育委員会・仙台市教育委員会・宮城県高等学校長協会
公益財団法人日本教育公務員弘済会宮城支部
- 6 主 管 宮城県高等学校PTA連合会

7 東北地区高P連大会開催目的

会員が相互に連携し、子どもたちの豊かな個性の伸張を図り、社会の進展に対して主体的に取り組むことができるたくましい高校生を育成するため、研修・研鑽を積み重ね、今後のPTA活動のさらなる充実発展に寄与する。

8 東北地区高P連大会開催方針

- (1) 保護者と教職員の生涯学習の場として、高校教育に関する建設的な意見交換を行う。
- (2) 高校生の健全育成に関する問題について討議し、今後のPTA活動を充実させる。
- (3) 保護者・学校・地域社会がともに手を取り、高校教育の諸問題に取り組む。
- (4) 社会におけるPTAの役割を確認すると共に、会員相互の交流と連携を図る。

9 仙台大会テーマ、開催趣旨、研究協議テーマ

(1) テーマ

**「見つけよう 個を生かす時代のPTA活動
～一緒に探しませんか？ 多様性の時代にできること～」**

(2) 開催趣旨

現代社会はかつてないほど多様な働き方や生き方が求められる時代となり、多くの人々が自分らしい生き方を模索しています。個の尊重、多様性の重視などが叫ばれ、「集団」から「個」へ焦点が移っていく時代背景の中、PTA活動もまた、時代の変化に対応し進化する必要があります。

コロナ禍を経て、リモート環境が急速に普及し、オンラインでの会議や活動に参加できるようになり、地理的な制約を超えた柔軟な活動が可能となりました。これにより、多様な視点や意見がPTA活動に反映されるようになり、活動内容もより幅広く、クリエイティブになっていくことでしょう。

しかし一方で、人が集まることが制限された期間も長かったため、「人と人のつながり」が薄くなってしまい、PTA活動も低調になってしまった面もあります。人と人とのつながり、「絆」がなければ、「個」は「孤」になってしまいます。「個」を尊重し、多様性を重視した活動を進めるためには、「絆」もまた必要ではないでしょうか。

仙台大会が、コロナ禍で失われつつある「絆」を取り戻し、個の尊重・多様性の重視という時代背景に合わせたPTA活動を模索する機会になればよいと思っています。

子どもは、親の背中を見て育つもの。私たち保護者が多様な生き方を実践し、PTA活動にも取り入れることで、子どもたちに多様な選択肢と生き方の可能性を示すことができると考えます。

働き方も生き方も十人十色の時代、過去の学びをアップデートしながら、より良い未来を創るために、保護者はどのように子どもと接したらよいのか、これから生きる子どもたちに何を伝えることができるのか、私たちはどのようなPTA活動ができるのか、一緒に考えてみましょう！

(3) 研究協議テーマ 「個々の力を生かすPTA活動とは」

PTA会員も多様な人々の集まりです。この「多様」をPTA活動を進める観点でとらえると、個々の会員が持つ「力」や「強み」であるといえます。この個々の会員が持つ様々な「強み」をどのようにPTA活動に生かしていくかを議論していきましょう。

- 10 基調講演 講師 川口 淳一郎 氏
 (オーストラリア国立大学教授、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所名誉教授・元小惑星探査機「はやぶさ」プロジェクトマネージャー)
 演題 「やれる理由こそが着想を生む
 ～「はやぶさ」、「はやぶさ2」を完遂させた力～

11 大会日程及び会場

月 日	時 間	内 容	会 場・場 所
7月1日(火)	13:00～13:30	大会運営会議 (実行委員・各専門部代表・他関係者)	仙台サンプラザ ホール
	13:30～16:00	ステージリハーサル	
	15:00～16:00	研究協議打合せ・リハーサル (発表者・助言者・司会者等)	
	17:00～17:30	情報交換会受付	仙台サンプラザ ホテル
	17:30～19:30	情報交換会 ※アトラクション 宮城大学すずめ踊りサークル「娘すずめ。」	
7月2日(水)	9:00～9:30	大会受付	仙台サンプラザ ホール 〒983-0852 仙台市宮城野区 榴岡5-11-1 Tel 022-257-3333
	9:30～10:20	○オープニング・アトラクション 「宮城県大河原産業高等学校ギター部」 ○開会行事 開会宣言 挨拶・祝辞・表彰 東北地区高P連役員紹介	
	10:30～12:00	○基調講演 演題「やれる理由こそが着想を生む ～「はやぶさ」、「はやぶさ2」 を完遂させた力～」 講師 川口 淳一郎 氏	
	12:00～13:00	昼食・休憩	
	13:00～13:15	○アトラクション 「仙台育英学園高等学校チアリーディング部」	
	13:20～14:50	○研究協議	
	14:50～15:00	○閉会行事 次期開催県挨拶(秋田県) 閉会宣言	

第74回東北地区高P連 仙台大会次第

○ 7月1日(火) 情報交換会

17:30 ~ 19:30

会場：仙台サンプラザホテル

司会：宮城県富谷高等学校PTA会長 阿部理恵

- | | | | |
|---|-------------------|----------------------------|--------------|
| 1 | 開会のことば | 大会実行委員長 | 瀧口愛美 |
| 2 | 大会会長あいさつ | | 稲垣美樹 |
| 3 | 祝辞 | 宮城県教育庁副教育長
宮城県高等学校長協会会長 | 遠藤秀樹
樽野幸義 |
| 4 | 来賓紹介
(アトラクション) | 宮城大学すずめ踊りサークル「娘すずめ。」 | |
| 5 | 乾杯 | 宮城県教育庁生涯学習課長 | 三浦恵美 |
| 6 | 祝宴
地酒紹介 | | |
| 7 | 閉会のことば | 大会実行副委員長 | 杉浦誠 |

○ 7月2日(水)

1 開会行事

9:30 ~ 10:30

会場：仙台サンプラザホール

総合司会：黒田典子(フリーアナウンサー)

◇オープニング

高校生発表

宮城県大河原産業高等学校ギター部

- | | | | |
|-----|------------------|------------------------------|----------------|
| (1) | 開会宣言 | 大会実行副委員長 | 加茂祐一 |
| (2) | 歓迎のことば | 大会実行委員長 | 瀧口愛美 |
| (3) | あいさつ | 大会会長
一般社団法人全国高等学校PTA連合会会長 | 稲垣美樹
田名部智之 |
| (4) | 来賓祝辞 | 宮城県教育委員会教育長
仙台市教育委員会教育長 | 佐藤靖彦
天野元 |
| (5) | 来賓紹介
祝電披露 | 大会実行副委員長 | 大関友好
佐藤美香 |
| (6) | 表彰等 | | |
| | ①表彰状贈呈 | 受賞者代表 | 佐藤敏明 |
| | ②感謝状贈呈 | 受賞者代表 | 鈴木健児 |
| | ③令和6年度広報紙コンクール表彰 | | 青森県立五所川原農林高等学校 |
| | ④受賞者代表謝辞 | 受賞者代表 | 鈴木健児 |
| (7) | 東北地区高P連役員紹介 | | |
| (8) | 閉会のことば | 大会実行副委員長 | 佐々木寛 |



2 基調講演 10:30～12:00

講師：オーストラリア国立大学 教授 川口 淳一郎 氏
演題：「やれる理由こそが着想を生む
～「はやぶさ」、「はやぶさ2」を完遂させた力～」

講師紹介 大会実行委員長
花束贈呈 宮城県泉高等学校PTA

瀧口 愛美
中山 直子

〔昼食・休憩〕 12:00～13:00

3 高校生発表 13:00～13:15

仙台育英学園高等学校チアリーディング部

4 研究協議 13:20～14:50

テーマ 「個々の力を生かすPTA活動とは」

コーディネーター 宮城県高等学校PTA連合会 前事務局長 三塚 明彦

- (1) 研究発表 各 県 代 表
- (2) 質疑応答
- (3) 指導助言 宮城教育大学元特任教授・リフノス館長 野澤 令照

5 閉会行事 14:50～15:00

- (1) 次期開催県あいさつ 秋田県高等学校PTA連合会会長 菊地 佐起子
- (2) 閉会宣言 大会実行副委員長 佐々木 寛



開会行事 開会あいさつ

第74回東北地区高等学校PTA連合会

仙台大会会長 稲垣美樹

皆さん、おはようございます。本日はお忙しい中、第74回東北地区高等学校PTA連合会仙台大会にご参集いただき、誠にありがとうございます。東北各県よりお越しいただいた皆さまに、心より歓迎をいたしますとともに、貴重なひとときを皆さまと共に過ごすことができること、大変うれしく思っております。また、本日はご多用のところ、ご来賓の皆さまにもご臨席賜り、本大会を盛大に開催できますこと、心より感謝申し上げます。

先ほど、実行委員長からお話がありましたが、今年の大会のテーマは、『見つけよう 個を生かす時代のPTA活動～一緒に探しませんか？多様性の時代にできること～』といたしました。皆さんも感じていらっしゃると思いますが、今、社会は目まぐるしい速さで変化しております。価値観も、家族の形も、働き方も、子どもたちの過ごし方も、昔と比べて、随分、多様になり、そして尊重される時代になりました。

そのような時代に、PTA活動も、みんなが同じようにやるのではなく、個を生かしながら、それぞれの形で関わるのが求められているように感じます。実際、PTAって大変そうという声もありますが、その一方で、お友達のために何かしたい、学校や地域とつながってほしいという気持ちも、私たち保護者の中にしっかりあると思います。だからこそ、必要なのは、無理なく関われる、柔らかくつながるPTAの形ではないでしょうか。

それぞれできることを持ち寄って、一緒に考えていく。そうした新しい関わり方を、私たち一人一人が見つけられたらいいなと思っております。今回の大会では、各県の取り組みや工夫、そして、ヒントがたくさん紹介されます。自分たちの学校にも取り入れられそうなアイデアがきっと見つかるはずと、私もとても楽しみにしております。どうぞリラックスして、いろんな意見に耳を傾けていただければと思います。

結びになりますが、本大会の開催にあたり、各関係団体の皆さまから、多大なご支援とご協力を賜りましたこと、重ねてお礼申し上げます。また、準備にあたり、ご尽力いただいた宮城県の皆さま、そして、ご支援くださった全ての関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

それでは、本日が実りある一日となりますことを心より願うとともに、皆さまの今後ますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げ、あいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。



あいさつ

一般社団法人全国高等学校PTA連合会

会長 田名部 智之

皆さん、おはようございます。第74回東北地区高等学校PTA連合会仙台大会が、こうして盛大に開催されますことを、共催者の代表としましてお礼申し上げます。

ありがとうございます、と言いながらも、私、全国会長ではありますけれども、今から4年前、この東北地区の会長を務めた、皆さんと同じ東北の仲間でございます。私は、青森県は八戸市出身。そして、現役の八戸工業大学第一高等学校のPTA会長でもございます。

昨日、情報交換会に参加し、たくさん地域の地酒なども頂いたのですが、その情報交換会の中で、稲垣会長が、今、ホームステイのお子さんが来てらっしゃるんですね、外国から。私のうちも何度か、ホームステイのお子さんを受け入れたことがあるのですが、そのお子さんが帰った途端にへとへとになって、もう具合悪くなっちゃって、寝込んでしまうくらい、気を遣っておりました。

何が言いたいかと言いますと、私、東北出身ということで、この東北大会、皆さんと気心知れた仲間と、こうやって出会えるということで、本当に楽しく思っております。気疲れしてしまっただけで、例えば、ホームステイで迎え入れたお子さんも、こっちも疲れるけど、向こうも本当は疲れているはずなんです。気遣って、大変必要ではあるんですけども、先ほど会長がおっしゃっていた、無理なくリラックス、これがいいんじゃないのかなということ、今、北海道大会から始まって、北海道地区、九州・沖縄地区、東海地区と、私、全国回っているんですけども、この東北地区に来て、本当にこの東北のリラックス感というのが、今、PTA離れと言われている中でも、非常に大事なキーワードなのではないかと思っております。

今日は、基調講演とか、研究協議とかがあります。ここで、先進事例に取り組みながら、各校単位PTA、そして県PTAが、コロナ禍以降の新しいPTAを模索していけたらいいのではないかと思います。

この東北大会、仙台大会の開催、そして成功をお祈り申し上げるとともに、来月、三重大会、全国大会がございまして、私が主催者となっておりますので、多くの東北の仲間に三重に来ていただきたいということを、合わせてお願い申し上げまして、共催者の代表としてのごあいさつとさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

来賓祝辞



宮城県教育庁副教育長 遠藤 秀 樹

(佐藤靖彦教育長祝辞代読)

皆さん、おはようございます。宮城県教育委員会副教育長の遠藤でございます。佐藤靖彦教育長でございますが、公務の都合により、出席できませんでした。祝辞を預かってまいりましたので、代読をさせていただきたいと思っております。

第74回東北地区高等学校PTA連合会仙台大会が、東北各地から数多くのPTA会員の皆さま方をお迎えし、ここ宮城の地で盛大に開催されますことを大変うれしく思いますとともに、心よりお祝いを申し上げます。ご参会の皆さま方におかれましては、日頃より、高校生の健全育成のため、会員相互や家庭・地域・学校との懸け橋としてご尽力されておりますことに、厚く感謝申し上げます。

本県では、昨年、宮城県高等学校PTA連合会が創立70周年を迎え、記念式典が開催されました。各県におかれましても、素晴らしい歴史と伝統ある団体として、今日まで継続して活躍されてこられましたことに、深く敬意を表する次第でございます。

さて、青少年を取り巻く社会や家庭の環境が複雑化、多様化するとともに、急激な少子高齢化の進行により、東北各県において、これからの地方創生を担う人材の確保・育成が大きな課題となっております。その解決に向け、子どもたちが地域社会をしっかりと見つめ、自分の可能性を見だし、地域に貢献しようとする意識や実践力を育む教育活動を展開していくことが重要となっております。そのためには、家庭・地域・学校の連携が必要であり、その要として、PTAが大きな役割を担っているものと認識をしております。このことは、本大会のテーマである『見つけよう 個を生かす時代のPTA活動～一緒に探しませんか？多様性の時代にできること～』につながるものでもございます。

本日もご参会の皆さま方が、記念講演や研究協議を通して研鑽を積まれますことで、家庭・地域・学校の連携をさらに強固なものとし、地域全体で子どもたちの成長を支えていく原動力になるものと確信をしております。本大会を契機に、東北各県の高校教育の充実とふるさとの未来を担う子どもたちの育成が一層推進され、子どもたちの夢を応援するPTA活動の活性化が図られますことをご期待申し上げます。

結びに、本大会開催にあたりまして、ご尽力されました関係の皆さま方に、心より感謝申し上げますとともに、東北地区高等学校PTA連合会のますますのご発展とご参会の皆さまがたのご健勝、ご活躍をご祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

令和7年7月2日、宮城県教育委員会教育長 佐藤靖彦、代読でございました。本日は誠にありがとうございます。



来賓祝辞

仙台市教育委員会教育長 天野 元

皆さん、おはようございます。仙台市教育委員会教育長の天野でございます。一言、ごあいさつを申し上げます。

第74回東北地区高等学校PTA連合会仙台大会の開催にあたりまして、心よりお祝いを申し上げます。本日、東北各地より、多数のPTA関係者の皆さまをここ仙台の地にお迎えできましたことを誠にうれしく、大変光栄に存じます。また、本大会の開催にあたりまして、ご尽力いただきました関係者の皆さま、そして、日頃より、子どもたちの健やかな成長と学校教育の充実のために、ご支援をいただいていますPTAの皆さまに深く敬意と感謝を申し上げます。

先ほどご紹介のありました、今回の大会のテーマ『見つけよう 個を生かす時代のPTA活動～一緒に探しませんか？多様性の時代にできること～』、これはまさに、現代社会が求める視点を端的に表しているものと感じております。

多様性が尊重される今の時代にあっては、生徒一人一人の個性や強みを認め合い、そして、それを伸ばしていくことが家庭・学校・地域の共通の目標となっているところでございます。その中で、PTAの役割もまた、時代とともに変化し、より柔軟で、より創造的な関わりが求められるようになっていきます。本大会を通じて、皆さまが互いに情報を共有し、地域や学校の枠を超えて、連携を深めていかれることを大いに期待しております。

先ほどの宮城県大河原産業高等学校ギター部の演奏、そして、後ほどご披露される仙台育英学園高等学校チアリーディング部の演舞は、まさに生徒たち一人一人の個が輝く瞬間であり、私たちに教育の意義と希望をあらためて、示してくれているものと感じております。本大会が東北各地のPTA関係者の皆さまにとって交流と学びの場となり、今後の活動のさらなる活性化につながることを心より願っております。

結びになりますが、本大会のご成功と、ここにお集まりの皆さまのますますのご健勝、ご活躍をお祈り申し上げ、祝辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

受賞者代表謝辞



福島県高等学校PTA連合会前会長
(東北地区高等学校PTA連合会元会長)

鈴木 健 児

皆さん、おはようございます。令和5年度、東北高P連会長を務めさせていただきました、福島県立橘高等学校、こちら元父母と教師の会会長の鈴木健児と申します。とは言うものの、ついひと月前ぐらいまで、ばりばりの東北高P連の中で活動しておりました、昨日、情報交換会で鏡開きをやったのですが、それを鏡開きする方から見る方になったときに、終わっちゃったんだなと、東北高P連の仕事は終わっちゃったんだなと、少し寂しくなりました。

第74回東北地区高等学校PTA連合会仙台大会の開催、誠におめでとうございます。実は私、高校生の頃から、THE YELLOW MONKEYというロックバンドに心惹かれておりました、割と有名なバンドで皆さんも知ってる方が多いと思います。そのTHE YELLOW MONKEYは、1月にここサンプラザホールでライブをしているのですが、私、今同じステージに立ってるんです。大変興奮しております。少しだけちょっとテンションがおかしいことになっておりますけど、一言、謝辞を述べさせていただきます。

謝辞。まずは私のような若輩者が単Pを飛び越え、県・東北の会長職、全国理事を務めるにあたり、いつも穏やかな立ち振る舞いで優しく私を支えてくださいました田名部会長、山田前会長をはじめとする全国高P連理事の皆さま、東北高P連福島大会の開催など、東北高P連会長としての拙い仕事ぶりをフォローしてくださいました令和5年度東北高P連理事の皆さま、その東北大会の運営をはじめ、2年間の福島県会長職を全力サポートしてくださいました福島県高P連の皆さま。上の娘から途切れることなく下の娘の卒業まで、6年間共に活動してまいりました橘高等学校の皆さま、そして、こうしてお集まりの東北6県を代表するPTAの皆さま、多くの方々の支えがあって、今ここで自分の気持ちを口に出せる貴重な時間をいただいております。感謝の言葉がいくつあっても足りません。本当にありがとうございました。

そして、古沢会長をはじめ、令和6年度東北高P連理事の皆さん、ちょっと堅いね、いつもの呼び方で呼ばせてください。和君、博君、尚ちゃん、美樹ちゃん、そして、かなちゃん。楽しかったね。全国だろうが、東北だろうが、理事会のたびに6人で集まっているいろいろ話をしてきました。自分の子どものこと、単Pのこと、県の課題、東北で考えること。みんな、熱くて真剣でした。会議の前のランチミーティングも、ちょっと目を離すと追い付けなほどのグループLINEも、いつも本当に楽しかった。楽し過ぎて、はしゃぎ過ぎた面もあったかもしれません。

でも、こうして常に全力で楽しむことで、少しずつ化学変化って起きるんです。単Pに戻ってからも同じように僕はPTA活動を楽しもうと思って、行事があろうがなかろうが、事あるごとに学校に顔を出して、そういうことを心がけてきました。幸い、娘たちも学校で会ったときに、なんで親父来てんのかよ、みたいな、嫌な顔一つせず、仲良く話をしてくれるいい子どもたちでした。そうすると、少しずつクラスメイトのお父さんがPTA会長ってことが認知されていくんですね。すると、子どもたちにも変化が起きるんです。

私、3月の卒業式で、「クラスメイト・部活の仲間・先生と一緒に過ごせるのは、今日しかないから、3年分のありがとうを伝えるんだよ」、そう祝辞で述べたんです。そしたら、その日の夜に、卒業生のお父さんから連絡がありまして、PTA会長が今日は感謝を伝えようと言っていたからと、福島県の外に進学されるお子さんが、もしかしたらもう県外で就職しちゃったらここに戻ってくることはないかもしれないと。だから、お母さんありがとう、と、花束を買って帰って来たと。お母さん、号泣したと。会長の祝辞のおかげですと。私もうれしくなりました。これ

こそ、PTAでやれる教育なんじゃないかなと、自画自賛ですけど思いました。

すいません。余談ですが、娘が卒業式の後、お父さんなかなかいいこと言うよねって言われたっていう話をされて、そのお父さんなかなかいいこと言うよねって言っていたお子さんたちが私のインスタをフォローしてきて、しゃべってること見られてると思うと、うかつなことは言えなくなってきましたね。でも、子どもたちに真剣さはちゃんと伝わりますっていう好例だと思ったので、話をさせていただきました。

だらだらと長くなってしまいましたが、今日お集まりの皆さん、どうか楽しんでPTA活動してください。子どもたちと一緒に暮らせるのも、あと3年ないかもしれません。どうぞきらきら輝いて見せてあげてください。子どもたちが親になったときに、そういえば当時はPTA楽しそうにやってたなって、興味を持って取り組んでくれるお父さんが一人でも増えるのなら、この先も反対論になんか負けない強い会であり続けたいと思います。いや、あり続けます。

この先もPTAという集まりが、子どもたちのために、親と教師が全力で楽しむことのできる素晴らしい団体であることを心からお祈りして、感謝のあいさつに代えたいと思います。皆さまに支えられて、楽しめました。本当にありがとうございました。





基調講演

演 題

「やれる理由こそが着想を生む
～「はやぶさ」、「はやぶさ2」を完遂させた力～」

川 口 淳一郎 氏

オーストラリア国立大学 教授
国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所 名誉教授

皆さんおはようございます。私は仙台にいた時に非常にこの辺りを歩いていましたし、隣のサンプラザにフィットネスジムがありますね。その会員だったので、ほぼ毎日のようにこちらに来ていました。「こちらまでタクシーを用意しましょうか」とんでもない。全部歩いて、歩き尽くして、よく知っているところでありました。

P T Aの会といいますと、10年ぐらい前でしょうか、和歌山で全国大会をやりまして、何に驚いたかという、大きなホールがありまして、その参加者の数が1万人いるんですよ。1万人の前でしゃべったことは生まれて初めてでした。だけど、実際は緊張感が欠けるというか、いろいろな人がガヤガヤと歩いているんですよ。横には模擬店があったりして、全然集中できなかったという思い出があります。

今日お話しさせていただく内容は、P T Aということなので、平日の昼間ですから、聞かれる方はきっと先生方か、あるいはご父兄の方が主なのかなという想定で来ています。内容は、科学技術の話も出てきますが、どちらかという教育に関係する部分を取り出してきたかなと思っていますので、どうぞよろしくお願ひします。

タイトルは唐突かもしれませんが、「やれる理由こそが着想を生む」というタイトルです。いつも講演を始める時には必ずこのページを用意させていただいています。「自由な発想が大事です」。もちろんそうなのですが、ここで皆さんには、あまり真剣に聞いてもらうというよりは、どちらかという力を抜いていただきたいということです。簡単に言うとアイスブレイクのページでありますね。簡単に言うと、駄じゃれを言うから皆さん用意して笑ってくださいよ、というページです。なかなかこれは大変なことです。受けなかったら講演全体がめちゃくちゃになると感じの、冷や汗ものなんです。やってみたいと思います。

もう暑くなってしまって、仙台も暑いですね。冬になると山形は樹氷があって、あの樹氷は素晴らしい。どう受け答えるかという、「Awesome（おお寒）」と。分かるでしょうか。

「Awesome」は英語の言葉ですが、素晴らしいという意味です。実に要を得た回答ではないかと思ひます。コロナの中、配達を頼むことが常習化してしまひて、配達を頼まない、間に合うかなと。「Uber Eats（ウーバーイーツ）」（ウーバー、何時？）と。いちいち何が面白いかは言ひません。私は東京というか、西側のほうに住んでしまひて、中央線でよく都心に出るのですが、信州や甲州から特急電車が来ます。途中で構内にアナウンスが流れる。途中で「特急列車がイノシシとシカに衝突して遅れています」というアナウンスが入るんですね。これは「しょうがないな（蝶がないな）」と。これも何が面白いか言ひません。レスポンスをする時には遠慮なく、笑っていただきたいと思ひます。講演とは面白いもので、聞かれています人の顔を見ることでうまく進行ができるものです。真っ暗だと実にやりにくいんですよ。レスポンスがあると、あるいは寝ているなと思ひると、違う話題に切り替えたりするもので、皆さんの協力あってだと思ひています。

「はやぶさ2」の話です。2020年ですから、もう5年になろうとしていますが、オーストラリアの砂漠で幸ひカプセルを回収できました。私がオーストラリアというのも何だかんだといひて結局「はやぶさ」つながりというか、結局そこに戻るんですよ。不思議な縁であります。今回もオーストラリアでカプセルを回収しました。赤い土の砂漠です。一応砂漠になっていますが、

砂漠といってもたくさん木があります。どちらかというと降水量が少ないというだけのことで、オーストラリアは広いですから、そこをお借りしてカプセルを回収したわけです。幸いサンプルがたくさん採れました。

採れて当たり前ではないかと思うかもしれませんが、「はやぶさ」を最初に作ろうと計画した時に一番不安だったのは、相手の硬さがどのくらい分からないことでした。だって、行ったこともないんですからね。写真もないですから。相手はどのくらい堅いのか、柔らかいのか。重力は非常に小さいので、ひょっとしたら真綿のように柔らかいかもしれない。着陸する時には、ひょっとしたら着陸しても潜っていくのではないかということまで、いろいろ考えなくてはいけなかったのです。サンプルを採る時に弾丸を撃つんですね。「はやぶさ」が訪れた「イトカワ」という小惑星には砂地がありました。ご記憶かどうか分かりませんが、砂地があるのだったらスプーンを持ってすくえばいいのではないかと考えられます。しかし、理屈の上では、小さい天体の上には砂地はないはずだったのです。「イトカワ」の時には例外だったという結論を出しているんですよ。

なので、やり方としては、石であっても必ずサンプルが採れるようにと、弾丸を撃つ方法を堅持していったわけです。その理論は非常に正しくて、「リュウグウ」は石だらけだった。だからサンプルが採れたんですね。一番サンプルを採るに適切な硬さは、レンガぐらいの硬さ。そのぐらいの硬さだと一番サンプルが採れますが、この写真が物語っているのは、まさにそのぐらいの硬さだったということです。事前に検討して、そして砂地があったことは忘れて、そうやって装置を作ったことで成功しているわけですね。「はやぶさ」では、残念ながら送った指令の中に誤りがあって、結局微粒子しか採れなかったのですが、今回は大変大きな成功で、私は非常にうれしく思っています。

科学の話です。一つ大きな課題といえますか、解明しなければならない問題は、地球の水はどこから来たのかということです。ちょっと専門的というか、私は別に科学者ではないですから私の専門ではありませんが、太陽系が出来上がって10億年ぐらいたつと、太陽系は50億年の歴史があります。後期重爆撃期という時代があって、小さな天体が内惑星にどんどん降り注いだ時代があったんですね。それら天体はどうして降り注ぐようになったかということ、恒星の周りを回る惑星を系外惑星といいます。大昔、私が子供の頃は、夜空を見上げて眺める星のその0.1%ぐらいに惑星があるかもしれない、その中のいくつかは地球と同じものがあるかもしれないと考えられていたのですが、今は時代が違います。系外惑星という、恒星の周りを回る惑星がたくさん見つかっています。簡単に言うと見上げる全ての星の周りには複数の惑星があると確認されているのです。今はそういう時代なんですね。そうやって見つける系外惑星で一番驚くべきことは、ホットジュピターと呼ばれていますが、大きな惑星が意外なところあるのです。太陽系は水金地火木と並んで、木星や土星という巨大惑星は中間ぐらいにあるでしょう。ところが、調べてみると、系外惑星ではそういうものはむしろ稀なんですよ。

「ホットジュピター」といって、太陽の一番近いところを巨大な惑星が回るのが普通。だから、今まで太陽系の出来上りを説明してきた理論は、太陽系しか見てこなかったための誤解で、他は違うということですね。そして調べていくと、まだ仮説ですが、昔、木星・土星は結構太陽に近い所であって、それが移動していったのではないかという説が出てきているわけです。そうすると、移動に伴って蹴散らされた小さい小天体が内惑星に降り注ぐ。地球にたくさんの小惑星や彗星がぶつかって、それが水を運んできたのではないかとされています。昔はほうき星が水を運んできたと思われていました。ほうき星は水ですからね。しかし、それはヨーロッパの打ち上げたロゼッタという探査機が現場に行き観測して

74回 東北地区高等学校PTA連合会仙台大会





ると、重水素の割合が地球の水とは違うということが分かって、ほうき星が運んできたとは限らないという説が確認されているわけです。そうすると、どこから来たか。一番可能性があるのは、まさに小惑星のような天体が地球に降り注いで海を作ったのではないかという説です。これが、小惑星探査の一つの大きな目標であるわけです。

JAXAの「SLIM」という探査機が、本当に幸いにも月面に着陸をしました。うれしいことです。この写真をご覧になった方は多いと思いますが、上にノズルがありますね。ということは、ひっくり返っているということです。「SLIM」は小さな探査機です。おまけで搭載されて打ち上げられたんです。ここに文科省のお役人さんはいないのではないかと思いますので言いますが、「JAXA」、宇宙航空研究開発機構は、ある意味では脅されているのです。何を脅されているか。「あなたたちはお金もないんだ。月への着陸はちゃんと成功しなさいよ。だけど他のものとはひと味違った着陸をしなさいよ」と、こう要求されているんです。これはすごいことです。「いや、この間もispaceが失敗したじゃない」と言うかもしれないですが、月は非常によく分かっている天体ですから、きちんとした重装備で行けば着陸できるんです。本当は粛々とそうやるべきだと私は思っていますが、お役所はそう言いません。「あなたたちはひと味違うことをやりなさいよ」と、「ピンポイント着陸を成功させなさいよ」と、脅迫をかけられている。これは大変なことですね。あとで出てきますが、無酸素で、シャツ1枚でエベレストに登ったら、これはもう拍手喝采でしょう。素晴らしい。もし失敗したら何と言われるかといったら、暴挙でしかないですよ。その暴挙でしかないことをやったら拍手喝采ですよと言われてやらされているというのが正直なところですよ。だから成功してよかった。なぜかという、この1週間後にアメリカの民間会社が月に着陸していますから。SLIMが失敗してアメリカの民間会社が着陸したら、あなたたちJAXAは何をやっているのと、取りつぶしになるかもしれない話です。そのぐらいの崖っぷちを歩いていることをよく知ってほしいと思います。

「はやぶさ」はちょっと違うんです、と書きました。よく報道では、「はやぶさ」は冒険をやって、挑戦をしてと。そのように一生懸命言っていたのですが、実際にやっていることはもっと手堅いんです。例を言うと、「はやぶさ」も「はやぶさ2」も1本足ですよ。4本足で着陸しようとは最初から考えていないんですよ。なぜ考えていないかという、小さい天体の上でじっとしていることは不可能に近いんですよ。だから、そうやって着陸するという無謀なことにチャレンジするのではなくて、必ず着陸するにはどうしたらいいか。1本だったら着くよねということです。それがスタートポイントで、そういう設計になっているんですよ。だから、むちゃなこととはしていない。逆に言うと、できることしかしていない。今日のタイトルにもありますが、そういうお話をしていこうと思うんです。

中国はすごい大きさの宇宙開発をしています。講演をするとよく聞かれます。「中国の宇宙開発はどのぐらいのレベルにあるんですか」。簡単に言うと、中国は日本よりはるかに先を行っています。「はやぶさ2号」が帰ってきたその1週間後に、「嫦娥5号」という、無人で月の表面からサンプルを採って地球に返す探査機が地球に帰ってきました。中国の探査機です。この探査機の重さは8トンです。人間を2人乗せた「アポロ」という着陸船の質量が15トンですからね。無人で8トンというのは桁外れの大きさです。さっき言いましたでしょう。重装備で粛々とやったらできるに違いない。その通り。そして返ってきたカプセルの重さは300キロ。すごいですよ。「はやぶさ」、「はやぶさ2」のカプセルは20キロしかない。この差は桁違いどころではない。こういう規模で中国は月探査をやっている。一番驚いているのは、月面から離陸した着陸機が、軌道上で無人で帰還する母船にドッキングして、サンプルを受け渡すということをやっている。これは、実は一番難しいんですね。切り離すのはいくらでもできますが、再結合はとても難しい。トランプ政権で危ぶまれている火星のサンプルリターン計画。アメリカとヨーロッパがもう30年ぐらい検討していますが、その中で一番難しいポイントはそこだと言われている。だからできていないんですよ。だけど、中国はこれをやり遂げてしまっているわけですね。というくらい、技術的には高いところを行っているんです。

そして、火星探査機。「天問1号」と書いています。これも火星の上に着陸をして、そしてそ

こからローバー、要するに移動の探査車を動かす。ローバーの重さは240キロ。すごい大きさですよね。そして、その質量が5トンです。もう桁違いの大きさで中国は多くの宇宙開発をしている。小惑星からのサンプルリターン、中国はもう既にははやぶさ・はやぶさ2のあとを追いかけて探査機を打ち上げています。もう飛んでいます。もう間もなく到着すると思うんですね。その規模は明らかにされていませんが、恐らく桁違いの大きさで、きっとやり遂げるのだと思います。非常に重要なことは、物量で対抗するんでしょうかということです。日本は日本ならではの匠^{たくみ}を發揮してほしいものだと思っているわけです。

「はやぶさ」、「はやぶさ2」につながる話は、我々が若い時の話、1970年代、80年代まで遡るんですね。「アポロ」の月着陸は1969年だったので、間もなくもう60年ぐらいになろうとしているのです。その翌年、1970年に日本初の人工衛星「おおすみ」が打ち上げられました。アポロの月面着陸から半年後のことですね。アポロを打ち上げたロケットは、今も「SLS (Space Launch System)」というものがありますが、それに匹敵する「サターンV型ロケット」という、100メートル以上の高さがある、重さ3,000トンぐらいの重さです。貨物船1隻ぐらいが打ち上がっていくようなものですよ。最初の人工衛星「おおすみ」を打ち上げたロケットはラムダロケット。電信柱のようなロケットなんです。載せている人工衛星は8キロですよ。そのぐらいの規模の差がありますからね。だから、宇宙開発を我々がやっているといっても、違うものをやっているとしか思えないわけです。1970年代には、1年に1度小さな人工衛星を打ち上げられるとお祭り騒ぎをしていた時代なんです。



私が進んだ大学院で過ごした研究所、今のJAXAの前身に当たりますが、私はそこで一番驚いたのは、そこで出会った人々、不思議な人たち、変人の塊というか、自信にみなぎった変人がそこにいましてね。この組織が私に対してすごく大きな影響を与えたと思うんです。このお話をしていきたいと思うんですね。

70年代、80年代に一番悩んでいたことは、我々は一体何をすることが求められているのかです。自問していたわけです。このまま米ソの後を追って、やがては月に行く、それをやれば良いのかどうか。きっとそれは誰からも後ろ指を指されることがない、きっと堅実な政策なんです。誰からも批判を浴びることがない選択。当たり前ではないかと思われるかも知れない。では我々は米ソの後を追って、同じことをコピーして歩けばいいのか。それが我々に求められていることだろうか。1970年代後半には、もうスペースシャトルの足音が聞こえてくる。スペースシャトルの初飛行は1981年だった。スペースシャトルが飛ぶと、世界中から使い捨てロケットはなくなると言われていた時代です。だから、この先に日本の宇宙開発はあるのだろうか。それが一番不安だったわけですね。

1986年、宇宙開発が世界中で始まって以来、初めての予定されている宇宙大イベントがありました。ハレー彗星の接近ですよ。ハレー彗星の周期は、76年で1周するので、普通の人は一生に一回しか見ることができません。1986年のハレー彗星の太陽・地球への接近に向けて、各国は共同で探査機を飛ばして共同観測をしようとしていました。私たち変人の研究所も探査機を打ち上げて、そして観測をして、データを交換し合っというところを行いました。そのために、新しいロケットを作って、新しい地上局まで作ったんです。この小さな変人の研究所にこんなことができるのかと、私にとっては非常に驚きでした。しかし、それをやってのけるんですよ。これはすごいな、というのが本当に正直な気持ちでした。

「はやぶさ」を始めると、国際会議に行くたびに言われていたことはこういう言葉です。「あなたたち、何でそんな小さな天体に行くの?」。「山は高いほうがいいし、訪れるべき天体は大きい

「はやぶさ」を始めると、国際会議に行くたびに言われていたことはこういう言葉です。「あなたたち、何でそんな小さな天体に行くの?」。「山は高いほうがいいし、訪れるべき天体は大きい

ほうがいいに決まっているでしょ」。「何でそんな所に行くんですか。もっと大きい所を狙ったらどうなのか」と、こう言われたわけですね。あたかも普通の考え方なんですよ。だって、月に行って、金星、火星、全部丸い天体ですよ。天体は大きくなると丸くなります。簡単に言うと、砂が地面に置くと広がっていくのと同じですが、要するに重力が大きいと丸くなる。直径が1,000キロを超えると、例外なく球形をしています。小さくなると球形ではないわけですね。そして、球形であるということは、大きい、重いので、中は高温・高圧になっています。別に溶けているとは限りませんが、重いものは下に沈んで、軽いものが上に残されていくのです。分けて化ける、分化とよく言います。水の中に石ころを入れると石ころが沈むのと話は同じです。そうすると、実は丸い天体の表面には、一番軽い材料しかないんですね。水はもちろん一番軽いので表面にある。水は地底にあるわけではないです。山に行くと石が、岩がある。その岩は、重そうに見えますが、地球を作った材料で一番軽いんですね。比重が3から4ぐらいですね。ガラスと同じとか、水晶と同じなんです。ところが、地球全体の比重は5から6あります。地球を作った材料には、もっとはるかに重い材料がたくさん含まれている。どこにあるかということ、表面にはありません。地中深くに沈み込んでしまっている。それが天体を作っているわけです。地震が起こるメカニズムはというと、中で何かが動くから。だけど、中にどういう物質があるかを直接観測した人は誰もいません。

では、どうするか。答えは、小さい天体に行くんですね。かつて小天体がぶつかって、衝突して惑星を作った。小さい天体は、形が小さいので丸くはない。重力も弱い。だから、表面にはかつて地球を作った重い材料も軽い材料も分け隔てなく表面にあるわけですね。そこから物質を持ち帰ると、由緒分かっている地球をかつて作った材料を直接手にすることができるようになる。これが目的なんですよ。だから、出かけるべきは、実は結論は小さい天体にこそ行くべきだということなんです。



私が宇宙探査を目指す大きなきっかけになったのは、大学時代にニュースで飛び込んでくる、「バイキング」というNASAの観測機なんです。小さいです。この右下に見える着陸機の大きさ、直径が1メートルぐらいしかないんですね。実物のバックアップがアメリカの博物館に行くと見られますが、この小さな中華鍋のように見えるアンテナ、これが地球と直接データをやりとりした

んですよ。その時代、今から50年前の話です。そして、上空を回っている母船に対してデータを送って、それを中継することをやってのける。火星の表面からカラー写真を送ってくる。衝撃的ですよ。なんといっても生命の培養実験をしたのが有名ですね。シャベルで土壌を掘削して、それを加熱して、そして生物の痕跡があるかを確かめようとした。ロボットそのもの。だから、飛ぶロボットをやってみようと思ったのが、私がこの道へ入るきっかけだったわけですね。火星の写真、左上に見えますよね。単なる岩山ではないかと思うかもしれませんが、ぱっと見て一番驚くことは、空が明るいですよ。月面はそうではない。月面は昼だって空は真っ黒。大気がある証拠なんですよ。大気があるから空は明るいんですよ。火星というのは、実は月面よりもはるかに人類が生活するには向いている天体だと思いますね。

時間を節約するために次に行きたいと思います。小惑星サンプルリターンのきっかけは、40年前、1985年に行われた研究会でした。この年、先ほどのハレー彗星に向けて二つの探査機を打ち上げます。1985年の1月と8月に打ち上げましたが、その中間に最初の研究会を開いたんですね。そして、翌年の1986年には、「アンテロス」という小惑星に向けて往復の飛行計画を考えて、プロジェクトを提案しようとしたのですが、残念ながらこの年にプロジェクトは開始することはあ

りませんでした。というのは、一番大事な推進機関、イオンエンジンの準備ができていない。化学のエンジンで飛ぶと、機体はほとんど9割が燃料みたいになってしまう。だから何も積めないんですよ。燃費の良いエンジンを開発して、そしてこのプロジェクトが実際に始まったのは1996年、10年後のことだったんです。そこから7年あまりをかけて探査機を設計、製作して、7年あまりをかけて往復の飛行をさせたという、ストーリーは30年ぐらい長い話ですね。ただ、新しいことをするには時間がかかる。それは覚悟しなくてはいけないことだと思うんです。

今日のテーマに通ずることですが、この写真は「はやぶさ2」が1回目の着陸を終えた時に、関係者が集まって集合写真を撮ったものです。私はここにいますが、とても見えません。タイトルは、「伝統は環境でつくられる」と書きました。この「はやぶさ2」に取り組んでいるメンバーは、「はやぶさ」の時の初代とは全然入れ替わっています。私は参加していますが、あくまでアドバイザー。ほとんど総取り替えなんです。でも、どうしてこうやって彼らがちゃんとミッションをやり遂げているのかが一つ大きなポイントなんです。

スポーツの世界でもそうですが、伝統校というものがありますね。この学校は駅伝が強い、この学校は野球が強いと、いろいろありますよね。でも、プレーヤーは毎年替わっている。それにも関わらず、その伝統校は伝統を重ねて行ける。それはなぜなのか。もちろんコーチがいいということはあるでしょうし、名前の知名度が高いのでいい選手が集まって来る、そこもあるでしょうね。だけど、大事なことは何かというと、それは心の問題だと思います。彼らは思うかも知れませんが、彼らだってできたし、私たちにだってできるに違いないと思う。そして、やらなければいけないと感ずるんですよ。感じざるを得ない、その環境が大事だと思うんです。そこに踏み込んでしまうとそう思わずにはいられない環境が育む軽いプレッシャーと自信こそが、この伝統を生んでいくんだと思う。人材育成が声高に叫ばれていますが、いちいち手取り足取り教えるから人材が育成されるのではなくて、こういう環境を残して、そこに踏み入れたらそう感じざるを得ないような環境を残して行くことが一番大事な人材育成ではないかと、こう思うわけなんです。

太宰の話をして。太宰は『富嶽百景』を残しています。『富嶽三十六景』は北斎の名作ですが、北斎が『富嶽三十六景』を描き始めたのは70歳の時だというんですね。非常にここは励まされます。私は今年70になりますが、まだこれからだと、そう思えることが大変幸せだなと思います。太宰は『富嶽百景』という小説を残していますが、それに出てくる風景描写、「富士には月見草がよく似合う」、「老婆は『おや、月見草』そう言って、路傍の一箇所を指さした。ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ。三、七七八メートルの富士の山と、立派に相對峙し、微塵も揺るがず、富士には月見草がよく似合う」。風景描写ですね。山梨県の御坂峠から富士を見ながらこの文章がつづられた、こう記録されています。しかし、これがつづられた時の解説がされているんですね。「自殺未遂を重ねて、しかも文学賞、肝心な芥川賞は取れずにいる。果たして自分はやっていけるのだろうか。弱そうに見えるけれども、あの月見草、立派に相對峙し、微塵も揺るがず、自分もそうありたいと思う。そうならなければならないと思う。不安に思うことはない。自信を持って取り組んでいこう」。気持ちを切り替えた時、この文章がつづられたと解説されているんですね。

大事なことは、自信とは誰かから授かるものではないということですね。自信は、切り替えるためには自分自身が切り替えていかなければいけない。多くの人がある壁にぶち当たるものですね。その時に、人から自信が来るわけではない。だけど、自信を切り替えなければ、切り替えることが大事だということを心に思っていられれば、この切り替えは自分でできるはず。だから、気持ちの上で、自分が切り替えるということを感じておく必要があるし、そういう気持ちを持っておくことが壁を突破する力になるんだと思うんです。

宇宙開発はまだまだ難しいものなのです。ロケットの成功確率はまだまだ高くはないですね。信頼性を90%、99%に上げるには、10%の投資の増加ではないんですよ。90%、99%に上げるには、10倍の投資が必要です。なかなかこれが気づけないんですよ。じっと見ると90%、99%、大して変わらないではないかと、こう思ってしまうんですが、そうではないということですね。共通するのは先入観です。思い込んでしまうんですよ。プロジェクトではよくあるんです。この

試験はお金もないし、ひょっとしたらやらなくていいのではないかという話をすると、最初は反対していた人もそのうち賛成に回ります。散々議論をしていると、さもやらなくてもいいということが当たり前に見えてくるんですね。集団催眠と書きましたが、本当に多いんですよ。

そして、宇宙開発の失敗の一番大きな要因は簡単です。試していないことが起こる。試さないんですよ。これはやらなくていいのではないかと試験を省こうとする。しっぺ返しは必ずやってきます。やらなかったことは何が起こってもおかしくない。そういうものなんですよ。だから、集団催眠に陥ることは大きなリスクです。リスクを客観的に回避しなくてはならないんです。客観的というのは、「思えてくる」ではありません。ちゃんと理屈があって回避をしていけばそれはそれでいい。

「はやぶさ」では「ターゲットマーカー」というものを投下しました。これは何なのかというと、表面の地形をカメラで見て、画像を見て、地形はこうだからここに降りよう、というのは非常に高度な道具なんです。画像の認識というか、ある種のAIみたいなものが格好がいいですよ。では、「はやぶさ」はどうしたか。画像認識を使わなかったかということ、違います。ちゃんとプログラムを持って行きました。でも、実際にそこで写真を写してみると、それは想定外の、全く思いもよらない画像に映ってしまう。だから、全く効果がなかったんです。



そのバックアップというか、本命というか、やり方の一つは何をやっていたかということ、往復30分以上電波の受信、飛行に時間がかかるのでリモコンはできませんから、その場で判断しなければいけない。そのために、相手の場所、相手までの距離をどうやって測るか。そのために、人工の標的を表面に落としました。画像を見るのではない。自然地形を見るのではなくて、人工の目標をわざと落とします。そこに向けて、フラッシュランプをたくんです。宇宙船がフラッシュランプを持って行くなんてことはあり得ないんですよ。気象衛星がフラッシュをたくと地球が明るく写るかということ、そんなばかなことはありません。そうです。フラッシュを持って行くということは、ものすごく表面に近いところまで行くと言っているわけです。だから、今だから、多分「はやぶさ」までの間で、フラッシュを持って行った探査機などあるわけはなかったんですよ。でも、持って行く。なぜ持って行ったか。道路の交通整理をしている方が、特殊な反射シートを付けた作業着を着て誘導していますが、あの反射シートは再び帰ると書いて「再帰性反射シート」と言うんですね。光が来た方向に反射光が返るんです。だから、フラッシュランプをたくと必ず自分のほうに光が返ってくる。明るく見えるわけね。そういうシートで作ってあって、フラッシュをたく。そうすると、置いた「ターゲットマーカー」の場所が分かるんですよ。高度なことは何も要らない。だから「はやぶさ」と「はやぶさ2」は表面に近いところでもそれを頼りに行動して歩けたわけです。

「はやぶさ」、「はやぶさ2」、着陸は何が一番難しいかということ、縦に通常に降りることではないです。それは簡単なんです。簡単というのは、測ればいいからです。高度計が付いているから。「ispace」は高度計がうまくいかなかったと書いていますが、高度は測れます。何が難しいかということ、横に動く速さなんです。横に動く速さが残って着陸すると、つんのめってひっくり返ります。人間だって、敷石の継ぎ目に足先を取られて転ぶ方がいますよね。横に1秒間に8センチ毎秒の速さで移動したまま着陸すると、つんのめってひっくり返ります。だから、横に動く速さを止めなければいけないんですよ。横に動く速さをどうやって測るかなんです。それを計測することが一番難しい。高度計では測れない。なので「ターゲットマーカー」を持って行っているわけですね。これがないと、横に動く速さが分からないからなんです。というようなことをやっていて、だからリスクを積極的に回避しに行くわけですよ。原理は簡単です。「こういうものを使えばこれができる」と言っているだけのことで、そういう塊でできているという

ことなので、チャレンジをして、大冒険をして、とは思わないで欲しいのです。

「はやぶさ」では匠をよく発揮できました。しかし、入門者の領域を一步も出ることにはなかったのではないかと。3億キロのかなたから1秒間に8,000ビットの速さでデータを送って来る。すごい技術に聞こえますが、実は技術の差がよく見えない世界でのことなんです。そのレベルで通信すると、木星からデータを送るとさらにスピードは4分の1まで下がってしまいます。しかしNASAが冥王星に飛ばした「ニュー・ホライズンズ」という探査機は、実際に木星からの距離でスピードは38キロビットの速さで通信をしているんですよ。「ニュー・ホライズンズ」が積んだ探査機の送信機の出力は12ワット。「はやぶさ」が持っていった通信機の出力は20ワット。「はやぶさ」よりもずっと小さいパワーで、10倍以上の速さで通信ができる。これが本当の実力なんですよ。「はやぶさ」、「はやぶ2」なんて、やっているのは、似たようなことをやっているだけで、実際には全く足元にも届いていない。我々が行ってたことは、よく似た入門機に過ぎないのではないかと、本当にそう思うんですよ。だから井の中の蛙ということなんですよ。本当の実力には全く追いついていないというのが正直なところです。

「人間はだまされやすく、思い込みが人を盲目にさせる」とタイトルを書きました。集団催眠もそうです。いろいろやっていると思わず盲目になってしまいます。お蕎麦屋さんの看板があって、伝統の味、なんとか蕎麦というお蕎麦屋さんがありました。入って、食べ終わって周囲を見渡すと、張り紙が貼ってあるんですね。「急募、アルバイト募集」というタイトル。「簡単な調理作業です」と書いてある。これはおかしいでしょう。伝統の味でしょ。達人が作らなければ伝統の味にならないじゃないですか。アルバイトが作っていいわけがない。だまされている。いろいろ食品に異物が混入すると、世間をにぎわすことが多い。一昔前はもっとおおらかだったんですね。私が若い頃に、ラーメンの出前を頼むと、おじさんが出前の箱にラーメンを入れて持ってきました。指をスープに突っ込んだまま、「はい、お待ち」と持ってきました。さすがに気になる。「おじさん、指がスープに入っているじゃないですか」と言うと、おじさんは返事してくれる。「いや大丈夫、熱くないんだから」。おじさんは、熱いか、そこが気になってしょうがない。だから、思わぬ勘違いで答える。というか、人間は何を気にしているかで、思い込みで左右されてしまうし、そこから来る誤解は多いんですよ。案外、思い込みに過ぎないことが多い。そう思うんです。それは過去を外挿して始まってしまふ。延長してしまふ、この誤解が始まるわけなんです。これは引退した内村航平さん、まだ若い10年以上前の話ですが、相模原市で行われた全国社会人体操選手権大会でお会いしまして、「はやぶさ」の模型をプレゼントさせていただいたんですが、ご縁があったのは、私も器械体操をしていた時代があったからなんですよ。内村さんに提案してみました。「新しい技に、『はやぶさ』と付けられませんか」。ちゃんと答えてくれたんですよ。「できないっす。」と言われました。私は体操から加点を学んだとお話をさせていただいています。大昔は、体操競技は10点満点だったんですよ。今は違いますよ。加点法です。フィギュアスケートも同じですが、青天井なんです。だから、世界新記録が生まれる世界に変わってしまっています。記者さんからは、何て言ったんですかと聞き返されることがありました。「破天荒ですか」と。KとHを替えると全く違う意味になってしまいますが、言葉の語感だけ似ていますから、つつい自分聞きかじったことがある言葉で置き換えて解釈しようとするわけです。熊本に講演に行くと、大学の先生から尋ねられました。「先生は<砂利>と<穴>はどっちがお好みですか」。私は土建屋ではないんですよ。何を聞かれたんだろうと分からない。失礼ですが、と言ってもう一回聞き返しても同じようにしか聞こえなかった。取りあえず答えないわけにいかないのだから、<穴>ですかと答えたのですが、もう一回聞くと意味が分かりました。それは、「JALかANAか」を聞かれたんですね。熊本のアクセントは、ANAは<穴>になるんですよ。だから、前はJALと言っているにもかかわらず<砂利>にしか聞こえない。

みんなそうなんです。自分のしたことに当てはめて理解しようとしている。宇宙に出掛ける方法はみんなロケットだと信じ込んでいる。それはそうです。子どもでも言いますよね。宇宙は酸素がない。空気がないから酸素もない。だから燃料を燃やすには酸素を持っていく。それがロケットだと言うと非常に論理が整っている。ですが、実はロケットに積む推進剤、燃料と酸化剤全体の90%の重さは、酸素の重さなんです。二段式ロケットだと、第一段が飛んでいるところは低

い高度で、まわりには空気がいっぱいあって、酸素もいっぱいある。わざわざ持っていかなくてもいいでしょう。と、簡単に結論づけられますが、その通りなんです。だから、世界中の技術者はみんな予測している。今に、何十年かたつと全然違う乗り物が登場する。今までの飛行機と同じように、水平に離着陸して宇宙に出掛けて戻ってくる時代が始まるんですよ。当然の結果ですが、いまだにロケットだと思っている。いつまで人間をロケットに縛り付けて大冒険させるのか、です。

やがてスペースプレーンの時代がやって来る。音速の5倍10倍という速さで、太平洋を2時間で渡る輸送機ができ上がる。アメリカが日帰りできる時代は数十年来に必ずやって来る。20年ぐらいか、30年後ぐらいかも知れませんね。アメリカ・中国・ロシア、みんなやっています。極超音速機。音速の5倍以上で飛ぶ飛行機のことを言っているんですが、これはもう既に飛んでいます。我々のJAXAの同僚は、毎年のように政府に予算要求をする。「こういうことで投資していかないと世界から取り残されて行く、こういう努力をしていないと、今のお子さんたちが皆さん方と同じぐらいの年になった時に、中国製の極超音速機に乗って旅行や出張に出かけなければいけなくなるかも知れない」。そんなことを聞いて元気が出るかどうかですよ。だから、この投資を惜しんではいけないんです。いつまでもロケットと考えるのは大きな勘違いです。

先ほど言った変人の代表選手の一人は長友教授^{ながとも}。亡くなりましたが、ご健在の時にはこんなことをおっしゃっていました。「見えるものはみな過去のものである。」ロケットは目の前に見える。それはなぜ見えるかという、過去のものだから見えるんだ。その通りなんです。見えていない未来こそ探して歩かなければいけない。そんなふうに学生さんにはお話をさせていたでているんです。残念なことに、この極超音速機の話はすっかり防衛の話でしかなくなってしまっていますね。北朝鮮のミサイルを報道するニュースには、時々こんなニュースがありますね。「今回の飛行は高度50キロメートルで、変則的な飛行」と言っているミサイル。それは極超音速ミサイルなんです。極超音速ミサイルは、撃ち落とすことはできないんです。弾道ミサイルで大騒ぎをしていますが、弾道ミサイルは加速している間はごくわずか、あとはそれこそ弾道なので、落ちてくる場所は全部予測できる。だから迎撃できるんです。極超音速ミサイルは迎撃できない。どこでどう経路を変えるかも分からないわけですね。そういう安全保障上の脅威にさらされているのが日本の宿命です。

民間による宇宙開発、もちろん期待はしています。最近話題に出ているイーロン・マスク、スペースXがいます。民間の宇宙飛行を目指す会社はたくさんある。日本にもたくさんありますね。何でロケットを目指してはいけないのかと、そうおっしゃるかもしれませんが。私は民間会社はロケットを打ち上げていいと思います。大事なのは、そのうち水平離着陸の宇宙飛行が始まることを考えておかなければいけない。しかし、民間会社がリスクを取るわけにはいきません。ですから、そういう最先端の開発は公的な経費でやるしかないとお話をしたいわけなんです。

何年前か、もう10年以上前ですかね。青色発光ダイオードで日本人3人がノーベル物理学賞を受賞しました。中村さん、赤崎さん、天野さんですね。赤崎先生は名古屋の先生ですが、2、3年前にお亡くなりになりました。赤崎さんと天野さんのご貢献は何かというと、新しい半導体を作ったんです。窒化ガリウムという、JAXAも宇宙でよく使っています。非常に効率が良くて素晴らしいものです。しかし、当時、青色発光ダイオードについては、世界中の研究者は別の材料で研究をしていました。セレン化亜鉛といいます。なぜこの材料で研究をしていたかという、青い光が簡単に出るからなんです。しかし、残念ながら、寿命が短くて、脆弱で使い物にならないものだった。ようやく結晶化に成功して、学会で発表した時、会場には赤崎



さんと天野さん以外1人しかいなかった。その横のセレン化亜鉛の会場は立ち見が出て、満員すし詰めだった。こういうエピソードがあるんですね。天才は、凡人が不可能と思っていることでも果敢に挑戦できる。なぜなら、彼らには見えていない未来が見えていたから。だからノーベル賞を受賞することになるわけですね。

「智者は未萌に見る」、『戦国策』にこういう言葉があります。「賢者たるものは物事が形になって表れてくる前にそれを見ることができる」。萌芽的とは違います。萌芽的とは芽が出た後のことを言っていますが、芽も出る前に何をすべきかが見えるかどうかなのです。ほとんどの人がそう思っていることが実を結ぶとは限らないということです。ベンチャーやスタートアップの会社でよく講演しますが、聞かれることがあります。「ひょっとしてこのアイデアは自分たちしか考えていないことで、大丈夫なんですか。不安に思ってしまう」ということを聞かれますが、そういうものがあったらチャンスだと思えばいいわけです。人が考えていないような着想をできるということは、その人にしかできないわけです。それは大きなイノベーションにつながるかもしれないではないか。自分しか思っていないのではないかと不安に思うことがあるんだったら、それはむしろチャンスと思えるべきなんです。

アメリカ、シカゴ郊外にフェルミ研究所という加速器の研究所があります。その初代所長ロバート・ウィルソンは、加速器を作る時に反対派の議員からこう言われたんです。「そんな機械で国は守れるのか。何の価値もないじゃないか。一体何の役に立つのか」と聞かれた。これはまるでかつての事業仕分けそのものだと思います。その時、彼はこう答えたんですね。「しかし、この加速器という機械を作ることで、守るべき価値のある国を作ることができる」。守ることでないです。何を守るのかですよ。価値のある国を作ることこそがゴールではないかと、こう言っているわけなんですね。これが科学技術の進歩を目指す大きな理由でもあると思うんです。国民が自分の国に本当に自信が持てるのかどうか。持てなくなったらお終いなわけですね。「夢を見られたら飯が食えるようになるのか。」科学技術が進歩したら経済は良くなるんですか。最終的には良くなるのですが、時間がかかるんですよ。こういう短絡的な質問があるんですが、「夢も見られないで果たして飯が食えるだろうか。」ゴールがどこにあるかをよく考えるべきだと、こう思うわけなんですね。

これは1955年、秋田県の道川海岸で、ペンシルロケットを空に向けて打ち上げ準備をしている糸川英夫が変人のボスです。小惑星に「イトカワ」と付いたのは糸川英夫にちなんでいるわけです。発射台は木でできているし、発射台をセットするのも手回しです。ボタン一つ押すと全部準備ができ、完了ということがあらかじめ用意されて始まっているわけではないということです。あらゆるビックサイズの始まりはこういうものなのだと気づかなければいけない。

1960年のこと、このまま秋田県からロケットを打ち上げると、やがてロケットはソ連に届いてしまうかもしれない。糸川英夫は全国各地を歩いて、新しい発射台を探しました。鹿児島県の大隅半島、内之浦に狙いを定めて出かけて行きました。大隅半島の付け根には鹿屋という街があります。今も鹿屋体育大学がある。自衛隊もいますよね。そこで糸川英夫はタクシーをチャーターしようとしたら、タクシーから乗車拒否されたんですね。あんな道が悪いところへは行きたくない。車が壊れてしまう。そうなんです。すごいところですよ。断崖絶壁を、本当に車1台が通るぐらいの未舗装の道が街と鹿屋を結んでいた。しかしその時、糸川英夫は諦めなかったんだね。渋る運転手を助手席に座らせて、自らハンドルを握って出掛けた。町で出迎えていた町長は、まさか運転している人が教授だと思わなかったというエピソードがあるんです。散々歩いたんですが、適地は見つかりませんでした。諦めて帰る途中、博士は県道沿いの茂みで小用を足した。「ここだ」と叫んだところが打ち上げ場所になった。こういうエピソードがあります。

別に小用を足していることはどうでもいいのです。大事なことは、自分の足で歩いて稼がなければ進展はないということです。誰かが助けてくれるわけではない。そうなんです。後からお話をしますが、そろそろ科学技術が進歩したから小惑星サンプルリターンをやってみたらどうですかと、オファーがあったわけではないんですよ。我々が提案したんです。提案するということは、査定を受けるということですね。査定というのは、要するに弱点を指摘してそれを却下す



るプロセスを言います。戦いは何か、という、首を切られないようにするためにはどうしたらいいか、ですよ。そのために、いろいろなことをして歩く。あとで紹介したいと思いますが、プロジェクトとはそういうものなんです。

「^{のうちゅう きり}囊中の錐」とは有名な言葉ですね。趙から楚に使者が出る。^{へいげんくん ひらはらくん}平原君。平原君ではないんです。平原君は、20人のメンバーを選ぼうとしましたが、20人目が決まらなかった。その時、^{もうすい}毛遂という人が率先して名乗り出てきた。しかし、平原君は冷たいことを言うんですね。「君の名前は聞いたことがない。囊中の錐だったらおのずと聞こえていたはずだ」。厳しいことを言いますよね。結局、毛遂は非常に大きな働きをした。その時、平原君は反省をするんですね。私はうわさに頼ろうとしたと。これには二つのポイントがあるんですね。一つは、前段のところは激励ですよ。努力するというか、おのずと才能があるのだったら誰にも訴えなくても見えるはずだ、そのぐらい頑張れ。後段のこと、「人を見る目を持つべし」だ、ということですよ。うわさに頼っているいろいろなことを信じては駄目だ。これも人材育成での大きな教訓だと思うわけなのです。

日本は注意書き列島ですよ。国際便に乗るとよく分かりますが、ANAの飛行機に乗ると、ドアが閉まってから、上空に行くと、定常飛行でベルトシートサインが消えるまで、日本のエアラインでは4回動画が流れるんですよ。最初に「罰金がかかりますよ、注意してくださいね」と言われて、2つ目は安全装備の動画が流れて、3つ目は飛行中はしがみついて立って歩く時、気をつけてください、4つ目は航空保安協会からお知らせです、と4つ流れる。海外はそんなことはないですよ。海外のエアラインは1回しか動画が流れない。日本は注意が散々流される。これはエレベーターの中の注意書きですが、典型的な注意書きです。こんなにあるんですね。注意書きが多いと日本人は安心して、だから信用できると思ってしまうというか、ルール潰けの中にいるんです。

「はやぶさ」でも信じられない経験があるんですね。「^{ミネルバ}MINERVA」という着陸機を小惑星の表面に投下しようとした前夜に、お役所から電話がかかって来た。「まさかその着陸機から電波が出るわけじゃないでしょうね。『イトカワ』での電波の申請はしたんですか」。そんなものは要るのかと思いますよね。「はやぶさ」が地球に戻ってくる前に、今度は電子メールがやってくる。「はやぶさ」に交付した電波の免許は深宇宙の免許で、免許を交付した時の法律では月の軌道の外側と書いてある。まさか月の内側に来て電波は出ませんよねと、念を押そうとするんですね。その人にとって何の得があるだろうと思います。

最初はいいんです。芽出しの活動を囲むように、ルールや規制やガイドラインが作られるのですが、いったんでき上がると恐ろしいことが始まる。全てはその規制の内側から考え始めると強制をされるし、そしてそれが当然だと受け入れてしまう日本人がいる。新しいことをしようと思ったら、規制がなかったら何ができるかを考えてみるべきだと思うんですね。知らず知らずのうちに規制を受け入れてしまっていないでしょうか。絶対に崩れることがないと思われていたベルリンの壁は45年で消えました。50年と持たなかった。先ほど言いました、30年のプロジェクトが始まったわけですよ。新しいことをしようという時は、今の規制で当てはめて考えるべきではないということですよ。それはいずれスクラップ・アンド・ビルドでなくなるんだということを前提で考える。そういう考え方が必要だと思うんです。

ルールを尊ぶ悲しさ。ある時こういう会話が聞こえて来るのです。「最高裁の判事は司法試験を通過してなくてもなれるんです。だってね…」と、こういう会話がある。私は正しいと思いますよね。というのは、法律が先にあるという考え方が間違いだと思うからなんですよ。スタンダードや規格が先にあるというのも間違いです。先に規格があって、それに沿って作るのは当たり前のように思うかも知れませんが、全てがそうなわけではない。いずれ規格だって変わってしまうはずなんですよ。新たな社会制度を作るのは創造なんです。法学部の人からはよく言われます。法学部はものすごく保守的な学部で、要するに法律を学んで、それを守らせるのが仕事ですよと言いますが、そうではない。新しく社会制度を作るのは創造なはずですよ。民族や国民の考え方はあらかじめ規定されるのは不合理な話です。だから、あらかじめルールがあると思うのは間違いなはずで、司法試験に通った人が最高裁の判事をやっては困ると思うわけですよ。

オバマ大統領は、在任中に「宇宙資源に関する米国の権利の確保」という法律に署名しました。簡単に言うと、宇宙資源を商業的に採掘利用する権利を米国民には与えると書いてある。資源利用には、月協定というものがあります。宇宙資源を利用する協定ですが、残念なことに先進国はほとんどの国が批准していません。日本もアメリカもヨーロッパも中国もそうなんです。だけど、それとほとんど同じ内容の法律を、米国の国内法としてオバマ大統領は署名したんですね。積極的資源利用を図ったらどうですか、ということなんです。権利を束縛するわけではない。日本でこういう議論が始まると、おそらく国際合意が先だ、待て、という思考パターンに入っていくんですよね。それが国際的にリーダーシップを取れない根幹だと思うわけなのです。

日本人は、取りあえず知っていることだけをしがちな国民でもありますね。ある国際高校生キャンプで、最初にトレンチを掘って、ペグを打って、テントの柱を立てようと行動に出る。東アジアの学生はそうです。日本、台湾、韓国、みんなそうだ。ヨーロッパの学生は何にもしようとしません。ディスカッションばかりしている。そして、あとの利用法、運営方法を議論している。テントが立ち上がると、ヨーロッパの学生が立ち上がって、ポリシーを語り出して、やがてヨーロッパの学生が最終的に仕切るようになる。アジアの学生は、よく言えば実務的、悪く言うと下請けに追われる。典型的です。宇宙開発もそうなんです。最初に動くのは極東の国々の人たち、研究者も非常によく動きますが、そのあと動けなくなる。なぜ東アジアの学生は最後にリーダーシップを取れないか。それは、テントの立て方を知っているだけだからなんです。取りあえずテントの立て方を知っているのだから、それをやっていると誰からも批判されることはない。後ろ指を指されない。だからそういう行動に出ます。が、やがて、どうして、何をしたいかわからなくなる。無理もない。ヨーロッパは1000年2000年、異文化、異教徒の抗争の歴史がある。彼らをして、こういう活動に駆り立てて歩いているわけです。外交下手な日本、ポリシー先行のリーダーシップを取れないのはこのせいです。取り組むのは結構ですが、知っていることだけをしても評価されることはないんです。知らないことでもやれるという理由を見つけて、自信を持って取り組んでいかなければいけない。その気持ちが大切なんです。そうでなければ、永久に下請けに回ることになるわけなんです。



創造の発想。死ぬ気で考えろ、そうしたらいいアイデアが生まれる、と考えがちですが、そんなことはないんです。そんなことでは発想はできないものです。気合で着想は生まれません。インスピレーションの語源となっているのはインスパイア、インスパイアとは魂を吹き込むことです。誰が吹き込むか。神様かもしれない。ぼんやりだけれども、いつも思いを巡らせていないと、着想は生まれてこないものです。いつも考えている必要はない。時たま考えればよい。思い出した時に考えつければ、それでいいのです。そして、歩いたり、リズムカルな運動をしていたり、そういうリズムの中からふとしたアイデアが発想されてくるもので、それを見逃さないようにすることが非常に重要なはずなんです。

だから、計画的に発想が生まれることはないんです。ここはちょっと矛盾しているでしょう。だって、研究にロードマップが必要だと声高に言われるので。研究にちゃんとロードマップを書きなさいよ。でも計画的になっている間は出るわけがないんです。

学生の皆さんに時々言います。大事にしてほしい言葉の一つ、「セレンディピティ」というもので、思いがけず発見をしてしまうという言葉なんです。導電性プラスチックを発明してノーベル賞を取られた白川先生の発明、その大発見はどこから始まっているかという、留学生が行ったとんでもない大間違い、実験から始まります。それは、黒い粉末ができるという実験だったのですが、入れる触媒の量を1,000倍間違えた。2倍3倍ではない。10倍でもない。1,000倍間違えたんだね。そうしたら、でき上がったものは黒い粉末ではなくて、ぴかぴか光る樹脂になって、



そこに電気が流れた。そこから始まるんですね。有名な話ですが、量子力学もそうですね。量子力学は、式の符号を一つ間違えた、それがきっかけで格別な進歩を遂げるわけです。ですから、思いがけず失敗していることが大きな大発見につながる。思いがけず発見してしまうセレンディピティというものが、科学を、そして芸術をドライブする大きな力になる。

セレンディピティを生む3要素。これは茂木健一郎さんも言っていますが、「行動と気づきと受容」。「やってみなければ分からないでしょう」なんですよ。「やりもしないで諦めるな」、ですね。気づくこと、観察眼も重要です。何か変なものができたなど、ポイと捨ててしまったら、それでお終いなんです。そうではない。「何だろうな」です。そして、「自分の想定と違って受け入れてみる」こと。受容ですよ。この3つの要素があれば、どなたの前にもセレンディピティは訪れる。茂木さんも言っている言葉ですが、この三つはぜひ大事にしてほしいと思うわけなんです。

石坂洋次郎いしざかようじろうの小説に出てくる、「孕んでいる未完成」という言葉。彼は健全な文学を志して、菊池寛賞を受賞しました。「はやぶさ」も実は文学賞を受賞しています。石坂は、そのレッテルが嫌いだった。健全な作家というレッテルが嫌いで、受賞パーティーの席上でこういうあいさつをする。「美しいバラの花だって、地中に根をはわせているじゃないか。きれいな乾いたさらさらした砂地では、どんなきれいな花だって咲くはずはないし、育つはずもないだろう。実際はもっとどろどろとした環境との戦いだ。完璧な環境が用意されて書けたわけじゃない」と言うんですね。不完全から始まっていると言うんです。小さな完成よりも、あなたが孕んでいる未完成のほうがはるかに大きなものがあることを忘れてはならない。不完全であることを恐れるな。むしろ不完全であるからこそ、発展があると思うべきだ。私はこうお話をさせていただいているわけです。数カ月前ですかね。イチローが野球の殿堂入りをした時にニュースが流れていて、イチローは言うんです。その時、投票をしたら満票ではなかったんですよ。「不完全だからこそいいんだ」と。私の発言がパクられたのではないかと思っていましたね。

そうなんです。不完全というのは、実は恐れるべきことではない。非常に重要な、励みになる言葉なんですね。慶應大学で講演をすると、学生からこういう質問が出たんです。「新たなものを創造するにしても、既に多くの技術や製品が作られて、実用になって出回っているじゃないですか。膨大な文献や本を読まなくちゃいけないんじゃないでしょうか。そんなことを考えただけで閉塞を感じてしまいます。先生、どんなふうに勉強しておいたらよいのでしょうか」。ありがちな質問ですよ。『典型的日本人学生病』と書きましたが、そうなんです。こういう発想が出てくること自体驚きなんですよ。いつの時代だって、さあこれよりもイノベーションになる、さあこれをここまでやったらノーベル賞が取れるなどということが、あらかじめ約束されていることなんかあるわけがない。過去を蓄積して、準備しておこうと考えるのは誤りです。そんなことを考えたら、中世から文献を全て読破していなければいけない。そんなことをできるわけではない。その通りです。

私が言いたいのは、「広い土台作り、ピラミッドの土台作りで人生を終えるな」ですね。ピラミッドは頂点があるからピラミッドと言うのであって、目指すべきものは頂点だ。高い塔を目指せとお話しさせていただいているんですね。細くてもいいんです。鉛筆のような、竹竿でも構わない。やがてそれが太って行って、大きな土台に育つと思えば良いわけですね。だから、全部隅々まで踏みしめられた土台を作るのではなくて、1ヵ所ちゃんと踏みしめられたところがあったら、竹竿を立てていいんです。竹竿を立ててはいけないと考えがちですよ。だってまだあそこは柔らかいじゃないかみたいなことを言うと、そこまで徹底して何かをやるとういうのが日本人の考え方だから、文献を読破しなければいけないように考えてしまう。そうではない。1ヵ所だけでも竹竿を立てる挑戦はしていいはずだ。

「人生が夢を作るのではない。夢が人生を作るのだ」という言葉。これは今をときめく大谷翔平が言っている言葉ですね。これはご本人が考えたとしたらすごいことです。若い時はこういうことをできないものなんですよ。お父さんやお母さんの言葉なのかもしれませんが、でもこれは真実なんですね。講演でよく聞かれることですが、先日女子高生からこういう質問がありました。「私は将来、宇宙開発に携わりたいんです。でも、私は文系なんです」と、こう言うわけ

ですね。それは、自分の今置かれている延長線上にゴールはあるでしょうかと聞いている。そうではない。自分がやりたければ、今の自分とゴールを結ぶ線をまず引きなさいなんです。だから、「人生が夢を作る」という考え方を取らなければ、それは絶対に解決できないことだと申し上げています。

JRの車内に流れていた広告で、「どうして日本人は英語が上達しないのか」。答えの一つにあったのは、日本人は完璧主義者で、今見ているページを100%理解しないと次のページに進まないからだ、こう語られていました。これは科学技術、宇宙探査でも例外ではありませんし、人文社会系でも同じことなんです。申し上げたいこと。「新たなページを開かないと、より広い世界は決して見えて来ない」。今見ているページの理解度は十分でないかもしれない。9割を忘れ去っているかも知れない。それでも次のページに進まなければいけないんですね。今のページの理解度が完璧かどうか、が問題なのではなくて、将来を見ないことのほうがはるかにマイナスだということを考えていかなければいけないわけです。



人間というのは、活動を広げることによって躊躇しがちな生命体なんです。河原の石一つ、現代の科学が全てを解明しているわけではないんです。その最も簡単な疑問、その石はどうやってできたのか？ この疑問に対する答えは、永遠に河原で石を眺め続けたとしても決して得られることはないんですね。「小惑星に行ってサンプルを持ってくる？河原の石一つ分からないのに小惑星まで出かけて行って、石ころを持って帰るんですか？」、こう聞かれる。河原で永遠に石を見ていて、それを解明しようといっても、解明し切れるわけではない。実は、その答えは宇宙・太陽系の始まりを解かなければ分からないことです。

そんなことは教科書に書いていないと言うかもしれませんが。先生方、皆さんには失礼ですが、教科書は回答があることしか書いていないんですね。この課題のこの疑問に対しては回答がないと書いた教科書はないですから。研究者が一番大事にしているものが何かというと、ポケットにしまい込むメモです。そのメモには何と書いているかということ、「このことが未解決で分からない」と書いてある。それが財産なんです。全ての研究の財産はそこから始まっているので、これが分かったということを書いてもしょうがないわけです。この回答は教科書にも書いていないし、文献にも書いていない。だからやらなければいけないということにつながっていくんですが、人類はこの活動に案外保守的なものです。「はやぶさ」、「はやぶさ2」が持ち帰ったサンプルはまさにそれに答えている。目の前に見えているものは幻でも理論でもない。理論上それは違うのではないですかという人は誰も出ない。だって、それは現物だからです。現物が持つ力がそれに答えているわけですね。

これもよく講演で出る典型的な質問の一つです。「駄目出しばかりでリスクを取らない組織で、新たな挑戦を勝ち取る方法は何ですか。これを教えてください」と質問に出ます。こういうことにすらすら答えられたら、誰も苦勞していませんよね。「はやぶさ」の例でしか申し上げられません。例えばカプセルの回収場所、100キロメートル四方の場所がオーストラリアだとできるわけです。100キロメートル四方の場所が日本にあるかということ、ないわけです。お役所に提案を持っていくと、お役所は、「では駄目ではないですか」と言われる。先ほど言いましたように、プロジェクトを進めるといえるのは、実は首を切られないための努力そのものです。どうしたかということ、最初は南極大陸で回収するという話をする。最終的にはどうかなと思っていますが、最初に首を切られないためにはどうするか。南極大陸としておけば、どこからも反対は出ないからなんです。その一方で、裏で今度はNASAに出かけて行って、いろいろ協力を依頼しに行



くわけですね。そして、NASA が作る小さなローバーを小惑星まで運んで行きますから、その代わり回収を手伝ってくれませんか、協働を提案します。アメリカ国内で回収場所を提供してもらって、その支援を要求する。そういう議事録を作ってお役所に説明に行く。今こういう話をしていますからと、それでプロジェクトの首をつなぐんです。こういうことをして歩くわけなんです。

実は、日本は「はやぶさ」のプロジェクトを始める時には、地球を回る軌道からですら、カプセルを回収したことは一度もなかった。その当時、300 キロメートル先の海の上にペイロードを浮かばせて回収することをやっていますが、成功率は50%ぐらい。そのぐらいの確率しかないんですよ。それでいて、このプロジェクトの説明に行く時には、このプロジェクトでは地球の引力圏の外の太陽を回る軌道を回る小惑星に着陸させて、サンプルを持って、そのサンプルを得たカプセルを指定の場所へ降ろして、そしてそこで開けてサンプルを取り出す、と説明する。お役所は言うわけですよ。「どこにそんな技術があるんですか」。その通りです。日本が軌道上から、地球を回る宇宙ステーションからペイロードをカプセルで回収したのは、「はやぶさ」が打ち上がった後のことなんですよ。その前にこのプロジェクトを提案しに行く。どうしたらこれでいいと言ってもらえるか。だから、NASA の世界最大の巨大加熱フードを貸してください、その代わり「はやぶさ」が持ち帰るかもしれないサンプルの何割かは NASA に永久に提供しますよ、ということをバーターして、そういう議論をして、調整を模索して、そして協議をしていく。NASA が協力しますからきっと作れますよ、ということをお役所に説明に行くわけです。プロジェクトとはそういうものなんです。だから、どこかからそろそろやってみたらどうですか、お金を出しますからと、そういうオファーがあったわけではありません。一生懸命首を切られないように、7年間行動をし続ける。これがプロジェクトなわけですよ。

よく学生さんに、「誰もが学びから脱皮する時が来る」とお話をさせていただきます。学校で習うことは How だけです。方法を教えられるだけです。リテラシーです。だけれども、何をすべきかは、学校で教えるものではないわけですよ。そのうち学びから転換が必要になる。学びのプロになることは容易なこと。それは教材を学習すればいい。しかし、学習から新しいことは生まれません。見えるものはみな過去のものであるからです。「ばかなことが一生つきまとうと情けなくなる」と湯川秀樹ゆかわひできはこう言っているわけです。まさにその通りでありますね。元NHK 解説の池上彰いけがみあきらさんからこんな話を聞きました。社内ではプロデューサーが過去の番組を閲覧できるようになっていたそうです。ただ、そのビデオの閲覧機にはこう書いてあった。「いくら見てもそれは過去の番組です。これから作る番組は見ることはできません」。プロデューサーたるもの過去は見るな、ですよ。入学、進学してくる大学院生に、私は必ずこう言うんですよ。「教科書、論文には過去しか書いていない。いくら読んだって新しいことはできない。最初の3カ月は全部独力で考えろ」と、こういうアドバイスをしている。学生さんはぎょっとするんですね。そんなことは言われたことがないから。でも、この考え方は若ければ若いほど早く伝えなくてはいけないことだと思うんです。

加点法の原点。それはディベートとプレゼンだと思うわけです。出る杭は打たれるし、能ある鷹は爪を隠す。この二つのことを総合すると、ディベートとプレゼンは否定されてしまう。極東文化とは、こういうものだと思うんですよ。でも、これを越えていかなければいけない。例えばこんな設問はどうか。「好きな夢を見る方法を考えなさい」。それから、「石器時代の娯楽は一体何だったかを考えなさい」。石器時代の人は別にいつもむっつりしていたわけではない。大笑いしていたはずなんですよ。「お風呂に入らなくてもいい方法を考えなさい」。これらは決していくら教科書やネットに頼ったとしても答えが出るわけではない。自分で考えろ、ですよ。テーマは荒唐無稽であればあるほどいいと思う。親や教師にも創造性が求められると思う。教育はコピー技術を教えるのではなくて、それ自身がアートであるべきだと思うわけです。海水の塩分濃度はと聞かれたら調べれば分かる。でも、その海水にどうしてナトリウムが含まれているのかと聞かれたら、それは誰も答えられないですよ。石はどうしてできたかもそうだ。元々は宇宙起源のもの、これらのことは実は根本的で、すごく簡単な問題ですが、それに気づけないでいるというのが情けないところだと思います。

私は青森県から依頼されて、毎年中学生向けの合宿型のキャンプをやっています。2014年ですから、もう11年前ですが、その時のプログラムの一つです。いろいろなテーマを先生方には考えていただきました。課題を考えるということはアートそのものです。理科の実験、子供用のプール。一端から他端まで手を触れずにウズラの卵を運びなさいというのがテーマだった。ただ、材料は限定されていて、ここに書いてあるものしか使えない中で考えてみなさいとやる。多くの人は、みんな帆掛け船を作った。どうでしょう。簡単でしょう。きつと思っていた、ゴムでスクリューを回すとか、袋に空気を詰める方法は、材料が貧弱だったので出てこなかったですが、ところが素晴らしいアイデアを出した生徒がいたんですね。その子はプレゼンと言って始めました。発泡スチロールの板の上にコップを二つ置くんです。最初は1個でしたが、個数を増やしましてね。それにストローを刺すんですね。そして、デモンストレーションを始める。最初にこの全体を沈めるんですよ。潜水艦か？みたいな感じでね。そして手を離すと、そのフロートが浮き上がって、そのカップから斜めに水が吐き出されて、推進力が得られて前進するという、これをプレゼンしてデモンストレーションする。これには驚きましたね。素晴らしいですよ。これはエネルギーをためているわけですからね。私は自信がなかったんですね。2時間ぐらいのプログラムでこういうことをやって一体何か実ることができるとかと思っておりましたが、見事に裏切られて、こういうことが生まれて、発想できて、これをプレゼンする機会が訪れるというのは素晴らしいなと思いましたね。それがきっかけで、今も青森県のプログラムは続いています。

そろそろ時間が来て、いろいろなことに答えていかなければいけません。「はやぶさ2」はうまくいっている。では、「はやぶさ」の、あなた方の貢献は一体何だったのですかと、こう聞かれます。僭越かもしれませんが、0から1を作ったとお答えさせていただいているわけです。どこにもプロジェクトにレシピがあったわけではないし、そしてマニュアルがあったわけではない。こういう壁にぶち当たった時はこうしろと書いてあったわけではないわけですね。それは無から有を作ったこと、その経験を、心を、次の世代に伝えていかななくてはいけない。伝えていくところが矛盾しているんですね。先ほど申し上げましたが、手取り足取り伝授することでは伝わらないし、それでは身につかないと思う。大事なことは、そういう実体験をさせられていたらと思うし、そう思わずにはいられない環境を提供することができたかどうか。幸い、「はやぶさ2」のメンバーは成功裡にプロジェクトを終えることができ、ようやく環境を残すことについてある程度、成功したのではないかと、私自身は非常にありがたく思っているところです。伝統になってこそ、それが日本を変えていくんだと思うんですね。

最後のスライドです。「はやぶさ」は前人未到の着想が生まれて、それを実現することができたんです。それはどうしてできたのでしょうか。よく海外のメディアから聞かれます。その原動力は一体何かというと、変人の文化の血である。その文化は非常に簡単です。「こうすればこうできる」と言っているだけのことなんですね。先ほど言いました。それが端から見ると、超変人に見える。自信過剰な変人の塊に見える、というところが、一番のポイントだと思うんですね。はやぶさのやっていることは大冒険をしたのか。先ほどいくつか例を申し上げましたが、こうすればできるはずだという対策をして歩いているだけなんです。椅子を積み重ねて、高いホールの天井に手を伸ばして何かをつかみ取ろうとすると、椅子の脚は何本あればいいか。最低限は3本ですよ。しかし、日本人は4本目の脚を付けなければいけないと思うし、5本目、6本目と言い出すんですよ。安全のためにはいくらやっても過ぎることではないのではないかと言うわけですね。しかし、6本目の脚を付けようと思っても、付ける場所がなくなると、日本人の考え方は逆転していきます。6本目の脚が付かないのだったら不完全だし、不十分だと。そういうものはやらないほうがいいのではないかと。やっちはいけないのではないかと。石橋を叩いて点検した挙げ句、渡らないのが一番安全でしょうと、そういう逆転をしていくわけなんですよ。変人の文化の血は、椅子の脚は3本あればいい。自分たちが自信の持てる3本脚の椅子は、自信さえ持てれば何十段でも重ねられるはずだ。そしてどこにでも手が届くわけですよ。ですから、我々には模範や手本が海外に存在する必要はなかったんです。自分たちを信じればよかったです。全ては心から始まると思うんですね。

講演のテーマは、「やれる理由を見つけて挑戦しない限り、成果は得られない」。挑戦するということはセレンディピティを生む一番最初の要素。行動ですよ。やってみなければ分からないではないかというところ、これがポイントだと申し上げて、講演を終わらせていただきたいと思っています。どうもありがとうございました。

司会：

先生、ありがとうございました。先生の貴重なお話、皆さん本当に食い入るように拝聴させていただきました。

それではここで感謝の気持ちを込めまして実行委員会から花束を贈呈させていただきますと思います。贈呈者は宮城県泉高等学校PTA副会長の中山直子です。



司会：

先生、ありがとうございます。本当に貴重なお話で、ちょっとお時間の関係で質問のほうにはいけないのですが、最後に先生からもう一言、皆様に頂戴してもよろしいでしょうか。

講師：

なかなかノルマのきつい会ですね。もう終わっていると思ったのですが。そうですね。

いろいろな言葉があるのですが、楽天の監督をしていた野村さんが言っていました。「負けるには負ける理由がある。勝つにはまぐれもあるけれど、負けには負けの理由がある。同じですね。やらないで、確かめていないことには、何が起きてもおかしくないということです。それが、本当の極意です。難しそうに聞こえますけれど、全てそれで、実は説明ができることばかりなのです。しっかりと、きちんと、リスクを計画的に避けていくことが、一番大切だと、私は思うのです。

司会：

はい、ありがとうございます。遠方より、そして貴重なお話を、本当にありがとうございました。川口 淳一郎先生に、もう一度大きな拍手をお願いいたします。本当に、ありがとうございました。



研究協議

【研究協議テーマ】

個々の力を生かすPTA活動とは

- コーディネーター
三塚 明彦 (宮城県高等学校PTA連合会前事務局長・元高等学校長)
- 助言者
野澤 令照 (元宮城教育大学特任教授
・利府町文化交流センター「リフノス」センター長)
- 発表テーマと発表者 (発表順)

県名	発表題	発表者・所属校
青森	多様性の時代につなぐPTA活動 ～100年の軌跡の先に～	青森県立三本木高等学校 PTA会長 中村 聖吾
岩手	小規模高校のPTA活動について ～宮古北高校PTAの活動から～	岩手県立宮古北高等学校 PTA会長 鈴木 恵
秋田	Partnership with teachers ～PTA活動って楽しい！～	学校法人和洋学園 秋田令和高等学校 前PTA会長 佐沢かな子
山形	みんなでつくる北高祭 ～つながる力 広がる絆～	山形県立山形北高等学校 PTA会長 熊谷 晃一
福島	俱に歩む 地域・学校・PTA活動 そして人 ～「過去・現在・未来」の繋がり・学校の統合について～	福島県立船引高等学校 PTA会長 橋本 芳和
宮城	地域とつながり子どもたちと歩むPTA活動 ～コロナ禍からの再出発・新たな取り組み～	宮城県名取北高等学校 PTA会長 佐藤 美香

多様性の時代につなぐPTA活動 ～ 100年の軌跡の先に～

青森県立三本木高等学校

PTA会長 中村 聖吾



これから青森県立三本木高等学校の発表を始めます。私はPTA会長の中村聖吾と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

青森県立三本木高等学校は青森県十和田市にあります。十和田市において観光業というのは大事な産業になりますので、皆さまに十和田市のことを少しでも知っていただきたく資料をまとめました。少しお付き合いいただければと思います。

十和田市は青森県南部地方の内陸部に位置し、景勝地の十和田湖奥入瀬溪流は青森県を代表する観光地として、毎年多くの方が訪れていただける地域となります。そして十和田湖周辺は国立公園としまして、生き物、自然が大切に守られており、近年ではアートの町を掲げておりまして、まさに芸術と自然が融合された本当に美しい町となります。

余談ではございますけれども、皆さまが敬愛するアントニオ猪木さんが、実を言うと数年前に十和田市の蔦温泉というところの向かいの方にお墓を建てられまして、それが数年前は話題となりました。それほど皆さん訪れて魅力的な地域ということになります。

続いて沿革となります。大正15年に開校し、来年の令和8年度に100周年を迎えます。平成19年に同じ敷地内に県立中学校が開校し、青森県内初の併設型中高一貫校となりました。詳しくはお手元の大会要項をご覧くださいと思います。

次に、個が生きる本校でのPTA活動を、特に皆さまにお伝えしたい項目を4つ紹介いたします。説明する内容はこのとおりです。順番に説明していきます。1つ目はPTA活動を中高一緒に行っていることです。本校のPTAの委員会はご覧のとおり学年委員会と専門委員会で組織されます。中高一貫校ですから、そのうち専門委員会は中高一緒の保護者で運営しております。



その活動の様子をひとつ紹介いたします。研修委員会は高校の文化祭で毎年レジンアクセサリーのワークショップを行っております。このときに中学校の研修委員の方も活動に協力をしています。去年の三高祭では2日間で約400名のお客さまにレジンアクセサリーを作っていただきました。子どもが中学校から高校に進学した際に、同じく専門委員会に所属してくれる保護者も多く、各専門委員会の活動がスムーズに運営されております。

自分だけのオリジナルアクセサリーを作れるということもあって、生徒には大変好評の活動となります。あまりにも来場者が多いので、いつもであれば毎年1部屋だけ借りてやっていますが、今年は2部屋で展開する予定となっております。

続きまして、PTA活動の紹介の2つ目は、委員選出方法を見直し変えたこととなります。こちらが皆さまに一番お伝えしたい内容となります。こちらは以前の各委員会の選出方法となります。まず保護者全体から学年委員を30名ほど選出し、その学年委員会を各専門委員会へ均等に配置しておりました。この形で学年委員会と専門委員会を兼務することになり、負担が大きいたことが課題となっております。

さらなる問題として、この30名の委員の選出がなかなか決まらなくて先生の負担となっていたことがありました。本校では入学式のときに、保護者全員に対してPTAの委員会やっていただけませんかというふうに立候補を募るのですが、なかなか手が上がらない。これ、多分どの学校でもそうかと思うんですけども、本校でも静まり返った空気の中で、先生が順番にあなたはどうですかという、そういうちょっと地獄の時間が過ぎていくということで、今、考えるとそも

そも選出方法にちょっと無理があったのかと思います。

こちらが改革後の形となります。まず学年委員会を独立させ、従来の兼務を解消いたしました。そして選出方法になるのですが、従来の一部の方が委員会所属ではなく、全員が3年間のうち1年間だけ、何かしらの委員会に所属してもらうということになりました。これ、勝手にこっちのほうで委員会を割り振るわけにはいかないの、後日プリントで何年生のときのどこの委員会に所属しますかという希望を取って、ほぼほぼその第1希望で振り分けることができました。これからの活動開始にあたり委員会として活動がスムーズにいくかちょっと心配ではありましたが、その結果は次のスライドをお願いいたします。

P T A行事の参加者が飛躍的に増加いたしました。こちらは総会時の写真ではございますけども、本校はもともと保護者の総会の参加率は高かったのですが、さらに増加したように思います。写真のように用意した席がほぼほぼ全席、埋まるといった状況です。また各委員会で活動する内容でも、参加者はかつての2、3倍となりました。今まで何かお手伝いをしたいのだけでも、どこか心の引っかかりからか、参加を見送る保護者が多かったようですけども、今回のこの改革はいわば全員のP T Aですよというメッセージが含まれており、功を奏した結果となりました。

P T A活動の紹介の3つ目は、専門委員会にフォレスト委員会があることです。奥入瀬溪流近くにある森の整備をフォレスト委員会で行っております。この森は平成21年に森林管理所と協定を結び、生徒と森林学習のために国有林の一部を借りています。青森県ではなじみのあるブナなどの植樹、観察を通して、森林づくりの大切さや環境保全を考える機会にしてほしいということで始めました。これまで生徒と委員会で約1万本の植樹を行っております。

こちらが今年の5月に行われた整備活動写真です。生徒の森林学習のために先生と一緒に草刈り作業をいたしました。これも不思議な話なんですけども、山で一緒に作業すると、共に汗を流した仲間ということで、すごく一体感が生まれるんですよ。

近年はクマが出没するようになりましたので、整備活動や生徒の学習活動も爆竹や笛などでクマ対策をしながら行っております。こちらの写真は委員会作業終了後の昼食になります。かつては森で食事をしていたんですけども、今はやはりクマの問題がありますので森で食事をしないようにしております。

次に本校で行われている異年齢交流に関わる取り組みを紹介いたします。こちらは付属中1年生が行う森林学習での事前学習の一環としまして、高校生の生徒が森の観察の仕方などについて教室で紹介いたしました。また中学生のフィールドワークと一緒に参加し、中学生と共にブナの木を観察を行いました。私はこの中高生共同学習というのは大変、意義のある活動だと思っております。社会に出るとわれわれコミュニケーション能力が必須となりますので、人を思う、人を敬うというのは、こういう人を介さなければ習得できない能力となりますので、こういう活動を増やしていきたいと思っております。

本校のP T A活動の4つ目としまして、保護者連絡会を紹介いたします。本校は進学に力を入れている学校になりますので、ほぼ全ての学生が大学受験を経験します。また大学受験は情報戦と言われておりますので、ここの大学の難解な受験システムの解説とか、そういったものを大手予備校からの講師を招いて保護者向けの講演会を開催しております。

「できるときに、無理なく、楽しく」をP T Aのモットーとしており、そうしたP T A活動を目指しています。しかし時代とともに夫婦の働き方も今、変わってきておりますので、従来のこのP T A組織制度を維持していくというのが大変、今は難しくなっております。今回のこの改革のように柔軟な対応をすることによって保護者の協力が得られたかのように思います。子どもたちにとって全ての経験が今後の人生の糧になります。私の思いとすると、この多感な時期、できるだけ子どもたちに楽しい思いをさせてあげたいという思いがあります。

今、青森県においても人口流出が問題で、結構子どもたちが外に出て行く。本校も進学校ですので、県外に出て行くことはあるのですが、その子どもたちがいずれ東北って美しいとか、人の触れ合いというのはいいなっているのを思い出していただければ、われわれの活動の意義があったものと思っております。これにて発表を終わります。



小規模高校のPTA活動について ～宮古北高校PTAの活動から～

岩手県立宮古北高等学校
PTA会長 鈴木 恵

(代理発表 教諭 藤倉 琢哉)



宮古北高校の総務を担当する藤倉と申します。本日、鈴木恵PTA会長は多用のためどうしても都合がつかないということですので、私が代わりに発表させていただきます。

こんにちは、宮古北高校PTAです。宮古北高校は岩手県宮古市田老にある全校生徒60名の小規模校です。昔から津波の被害を受けてきた地域にあります。小規模高校の良さ。行事や部活動で一人一人が主役になれる。教員全員が全校生徒をよく知っている。安心、安全な環境で学ぶことができる。地域との協働による魅力ある学校づくりです。

本校は全日制課程普通科の高校です。国語、地理、歴史、公民、数学、理科、保健体育、芸術、英語、家庭、情報、総合的な探究の時間と、公民、芸術、家庭、情報は1年生のみで、芸術は音楽と書道から一つ選択をして勉強しています。

2年生から進路希望によって2つのコースに分かれます。Aコースは進学コースで共通科目をバランスよく選択し、教養を深め上級学校への進学に備えます。Bコースはビジネスコース、商業科目、ビジネス基礎、簿記、情報処理を学習でき、資格取得を目指し商業系上級学校への進学や就職等に備えます。

本校の教育目標、スクールポリシー、グラデュエーションポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーとありまして、特色ある探究学習と魅力化協働パートナーということでやっております。



進路状況ですが、卒業生は進学、就職ちょうど半々くらいです。進学ですけれども公立短期大学、各種専門学校。就職については理容師、美容師補助、娯楽場、スポーツ施設等、接客員、旅館、ホテル、建築、施工管理技術者等となります。

部活動です。運動部はバドミントン部、卓球部、スポーツレクリエーション部で、文化部は吹奏楽部、茶華道部、写真部、美術部、手芸部となります。事実としては決して活発であるとか、レベルが高いとは言えません。部に所属している生徒も少ないです。しかし部に所属している生徒は自分たちなりの目標を立て、顧問の指導の下、一生懸命活動しているということも事実です。

本校のPTA活動についてです。4月、PTA・教育振興会会計監査、入学式、PTA説明会、PTA役員会。5月PTA・教育振興会総会、6月、3学年PTA進学説明会、オリンピア

体育大会。オリンピアでは生徒と職員に豚汁をPTAが提供します。豚汁作りには令和6年度は保護者14名が参加しまして、また2日間で47名の保護者家族が参観しています。家族でおじいちゃんおばあちゃんとか、お孫さんとかって、いろいろみんなで来るということがありまして、ちなみに令和7年度ですと、6月19日、20日にオリンピア体育大会を実施して、豚汁に12名の保護者の皆さまが参加してもらい、参観は2日間で延べ37名となっております。



9月はPTA役員会の2回目、PTA会報の1回目。10月、登校時一声運動・マナーアップ運動に、昨年度2日間の実施で延べ7名の保護者が参加しています。11月、文化祭・宮北祭、2学年PTA、1学年PTA。宮北祭は保護者、来場一般、合わせて141名の来場でした。2月はPTA役員会の3回目で、3月、PTA会報の2回目で、あと卒業式となります。



それでは生徒の様子と、PTA活動の写真を準備してきましたので見ていきたいと思えます。学校の前に近くに川があって、そこに面したグラウンドのそばが桜の名所になってまして、そこで集合写真を撮っています。自分たちでも撮っています。対面式の生徒会役員の生徒の皆さんです。対面式で1年生が入場してきました。伝統継承指導、応援歌とか校歌練習ですが、写真に載っているのが全校生徒になります。60名の全校生徒です。生徒総会の様子です。質問者の皆さん。防災学習ということで1年生が行っています。そのまとめの発表をしているところです。高総体のバドミントン競技に参加したときの様子です。卓球の様子です。

次に、オリンピアの風景ですけれども、この体育大会の第1日目のお昼にPTAによる豚汁の提供があります。お昼休みに調理室まで生徒が取りに来るとい、そういう形でみんなが取りに来て、おにぎりを持って来て、それを食べながら豚汁を食べるといった感じになっていました。

オリンピア、バレーボールです。バドミントン、ドッジボールです。卓球とバスケットボール。借り人競争ということで私が転勤してきた最初の年に、私は借りられる人になって、アキレス腱を切ったということもありますので、皆さまもご注意ください。

オリンピア3年生の優勝記念。

続いて、PTAの大事な行事で、登校時一声運動・マナーアップ運動の様子です。これは昇降口です。生徒が入ってくるところです。ちょうどバスが来て生徒が降りてきました。こういう山の中にある学校です。集合写真です。

ということで、これをもちまして宮古北高校PTAの活動の紹介といたします。ご清聴ありがとうございました。

Partnership with teachers

～PTA活動って楽しい！～

学校法人和洋学園 秋田令和高等学校
前PTA会長 佐 沢 かな子



昨年度まで4年間、秋田令和高等学校でPTA会長をしておりました佐沢かな子と申します。どうぞよろしくお願いたします。

本校は愛国婦人会が創設した女子講習部、つまりお母さんたちが作った学校が始まりということもあり、保護者の意見を大切にしてくれる学校です。令和2年4月に女子校の歴史に幕を下ろし、秋田和洋女子高等学校から秋田令和高等学校へと校名を変更し、新校舎で男女共学がスタートしました。

先生方の異動がないので、卒業生がいつ訪ねても温かく迎えてくれるアットホームな雰囲気のある学校です。近くには秋田市内の観光地、千秋公園があり、桜の時期にはクラスでお花見に出かけることもあります。周辺には文化施設も多くあり、非常に恵まれた環境にあります。

コース別学習が特徴で、一人一人の興味・関心や進路の目標に合わせて、2年生から6つのコースに分かれて学習します。先ほど保護者の意見を大切にしてくれると申しましたが、昨年、福祉コースの授業に手話を取り入れたらどうかと私が提案したところ、年度途中にもかかわらず、すぐに手話講座を開講してくれました。私も参観させていただき、子どもたちと一緒に学ぶことができました。

部活動が盛んで、ソフトテニス部と陸上競技部はインターハイの常連です。女子バレーボール部、女子卓球部も全国大会に出場し、活躍しています。このように校舎の中央には、優勝旗と優勝カップがずらりと並んでいます。文化部も校内外でパフォーマンスを披露し、地域の方々に喜ばれています。

では、本校のPTA活動についてご紹介いたします。4月に各クラス3名の役員が決まり、学年委員会と専門委員会の両方に分かれます。役員を決める際に参考にするのは、入学時に提出されるアンケートや投票、先生方からの推薦です。また学年末の役員会の終わりに、次年度も継続して役員を引き受けてくれる方には、こちらの用紙に名前を記入してから帰ってくださと呼び掛けも行っています。PTAに関わるととても楽しい1年を過ごしたから、来年度も絶対にやりたいと言ってくれる保護者がほとんどです。また私もそうですが、本校の卒業生が保護者になって役員を引き受けてくれる場合もあり、とても頼りになる存在です。

学年委員会は、5月の役員会の意見をもとにして、ほとんどの場合、先生方が企画してくれます。各学年の状況に応じてコース別学習説明会、進学のマネープランなどを開催しています。卒業生とその保護者を集めて進路体験を聞く会を開くこともあります。



総務委員会は例年、文化祭のPTAコーナーを担当しています。コロナ前は長年、餅つき体験が文化祭の人気コーナーでした。お父さんたちが杵と臼でお餅をつき、お母さんたちがお餅を丸めて、きな粉やあんこをつけて販売していました。

コロナで餅つきができなくなると、子どもへのメッセージやお弁当の写真を展示しました。メッセージカードはイラストや装飾付きの力作が多く、家族の愛情が感じられる展示となりました。近年はフライドポテト販売や、綿あめ体験などを実施し大盛況です。いろいろと意見を出し合い、先生方と相談しながら準備を進められるのが楽しいですし、何より文化祭当日の子どもたちの笑顔が見られる瞬間が最高です。



校外指導委員は、放課後の駅前巡視や朝のあいさつマナーアップ運動を通して、先生方と一緒に子どもたちの様子を見守る活動をしています。あいさつ・マナーアップ運動の際は、秋田県高P連の事務局から、のぼり旗と横断幕をお借りしています。子どもたちの笑顔が見れて、あいさつも交わすことができるので、この活動を楽しみにしている委員も多いです。



広報委員会は、PTA会報を年に2回発行しています。学校行事の撮影のときに、家庭の中とは異なる子どもたちの表情、友達と一緒にいるときの笑顔、真剣に取り組む姿などが見られるのは広報委員の特権です。編集作業は委員の負担にならないよう会議の回数を減らし、LINEを使って意見を求めています。集まったときには写真選びをしながら情報交換ができ、保護者同士の仲が深まるいい機会となっています。試行錯誤しながら作業をし、広報誌ができたときの達成感は大きいです。苦労のかいあって秋田県高等学校PTA連合会の広報誌コンクールでは、何度も最優秀賞を受賞しています。左側が昨年度、最優秀賞をいただいた広報誌です。

懇親会では先生方と保護者がざっくばらんに、さまざまな話題について楽しく語り合います。この笑顔を見てください。PTA活動ができる最後のチャンスが高校PTAだと思っています。このかけがえのない時期に、保護者もPTA活動を通して学校と関わり、子どもたちの成長を見守ることができます。住んでいる地域も年齢も異なる多くの保護者と出会い、交流を深めていく中で、時には子育ての悩みを相談したり、アドバイスをもらったりする機会もあります。PTA活動のおかげで一生の友達ができたといい人もいられるでしょう。これからも先生方と連携を取りながら活動の輪を広げていってくださることを期待しています。

PTA不要論もささやかれる昨今ですが、私たちはいつまでも子どもたちの応援団であるべきだと思っています。PTAは永久に不滅です。そして私が大好きな言葉、東北は一つ。本日は本当にありがとうございました。



みんなで作る北高祭

～つながる力 広がる絆～

山形県立山形北高等学校

P T A 会 長 熊 谷 晃 一



山形県立山形北高等学校の熊谷と申します。よろしくお願いたします。詳しい内容はこの冊子の 24 ページから 3 ページ分に書かれていますので、そこをご覧ください。本日はいつまでものお話をさせていただきたいと思ひます。

P T A の役員に選出されるということは、もらい事故のような感じで取られる方も多いのですが、実は幼稚園、小学校、中学校と上がっていくにしたがって、いわゆる負担感というものについては、高校は非常に負担感が少ないというのが印象であります。



山形県立山形北高等学校で取り組んでいることとしましては、小学校、中学校は学区がかなり限られた中で子どもたちの P T A 活動というのがあるのですが、高校になりますと学区が一気に広がっていきます。広がるということは、知らない人たちと子どもたちが一気に触れ合う機会が増えるということで、それは親にとっても同じことなんですね。全く知らない学区の方々と一緒に、学校の保護者という同じ立場になるときに、皆さん、子どもたちと一緒に親も不安でいっぱいなんですね。その中でどういうふうにしていけばいいだろうかと考えたときには、やはり楽しく P T A をやっている、というのが一番いいことなんではないかということで考えています。

私は、立場上は P T A の会長という立場ですが、特に統率力があるわけでもなく、有能なのか、無能なのかという話になると、どちらかという、無能な方なのですが、私自身にそんな能力がありませんので、逆に周りの人たちが、このままじゃ、やばいんじゃないかということで、かなり力を発揮していただいて、非常に人に恵まれたというのが正直な印象でございます。

北高祭というのいわゆる学園祭、文化祭なのですが、子どもたちにいろいろ模擬店とかも出すのですが、保護者としても何か参加したいということを考えて、具体的にはコロナの間はちょっと下火になったのですが、去年あたりからまた取り組みをさせていただいております。その出すものとしては、子どもたちの出すお店とかぶらないものということで、学校側と調整しながら今年度も頑張っていくということになっています。保護者の方たち、だんだんスイッチが入って来まして、今年なんかはかなり出したい種目が増えてきて、学校側とまたちょっと最後の調整をしているところでございます。

P T A といいますと、皆さんもご経験あるかと思いますが、やれる人、やれない人っていうのは出てくるのですが、目を閉じてもらうと分かると思うのですが、一部の方にだけ過剰な負担がかかります。何でもかんでもこの人に任せればいいやというので負担がどんどん一部の人にかかってしまっていて、他の人は傍観者になってしまう。傍観者になってしまう人はやはり疎外観というまではいかならないにしても、積極的に取り組むという姿勢にはなかなか結びつかないような感じなんです。これも煉獄さんに影響されたスライドですね。このような形で疲れ切ってしまっていて、端から見てる人にしてみれば、P T A に選ばれるというのは罰ゲームみたいになっ



ちゃうんですね。罰ゲームになるから嫌だなんていうので、そういう雰囲気になっちゃうので、それはよろしくない。

罰ゲームにならないためにはどうしたらいいかという、やるべきことを減らすのか、より多くの人で積極的に取り組んでいくのかという二つの方法になってくるかと思うのですが、たまたまさっきの話に戻りますが、うちの高校については人材に恵まれて、みんなでちょっとずつ負担をして、より良い方向に持っていこうという潮目になっておりますので、今は非常にいい感じに動いてるなという気がします。

一部の人だけに過剰な負担がかかるというのをなくすというのが一番大切なことだと思うので、知らない学区からたくさん集まってくる子どもたちが、高校に入って初めましてという中で、さっきも言ったと思いますが親御さんたちも同じような状況で、親同士が仲良く知り合いになっていくということは、非常に大きなメリットがあります。子ども同士も学校であったことを家庭で言える子、言えない子、いろんなタイプのお子さんがいます。そのときに保護者同士の情報共有というのがしっかりできていますと、ちょっと極端な話になりますけれども、例えばじめ問題の防止にもつながりますし、保護者同士の連携という、大人が仲良くしている姿というのは、子どもたちにはやはりこれが自然にいい感じの人間関係の構築というのを、生で感じる事ができるというふうに考えております。



中には、最初にPTAで頑張ろうと思う気持ちもなかったけれども、皆さんが頑張っていて楽しくやっているのを見て、PTAに参加したいなという感じになる親御さんたちもいるかと思えます。そういう方たちを、また途中であっても受け入れる懐の深さというのも必要だと思えますし、あとは先ほどもありましたが、PTAの中には3年間のうち1年だけやればいいのか、例えば小学校であれば6年間のうち1回は義務でやらなきゃいけないという感覚の親御さんたちもいます。

やはり事業の継続性とかを考えると、3年間、続けてやってもらうことが、一番、負担感が少ないことに結果的になります。1年生の間から楽しくやっていけるという雰囲気を、中学校3年生の親御さんたちにもうまく伝えていくということが大事です。中学校3年生から高校生に入ったときに、山形北高はPTAがすごく仲良くやっているよ、ということ、親御さんたちに事前情報として入っていれば、そんなに負担感もないのではないかと思います。

時間はまだいっぱい余っていますけれども、私たちの中で一体感をつくるには何がいいだろうかということで考えたベタな方法なんですけど、ちょっと脱ぎますけれども、すいません。はとちゃんじゃないですけど、こういう感じで北高のTシャツを作ったりしています。ありがとうございます。今、ちょっと反応が薄かったのもう一回。北高のおそろいのTシャツを作ったりしています。(拍手)ありがとうございます。やはり形から入るというのもとても大事で、実は1回目これ、作ったんですけど、その後でそんなのあるならもっと欲しいというお声が個人的に私のほうに来ていますので、また第2回で作るという話が今、出ております。

やはり皆さんで、大人たちが楽しんでやっている。北高祭の文化祭の出店もそうなんですけれども、突き詰めていくと、子どもたちのためなんだか、親が楽しいだけなんだかちょっと分からないんですけど、とにかく楽しみながらやっていくというのが、子どもたちには一番うまく伝わるPTAの存在意義なんではないかなと思えました。以上です。



「共に歩む 地域・学校・PTA活動 そして人」 ～「過去・現在・未来」の繋がり・学校の統合について～



福島県立船引高等学校
PTA会長 橋本 芳和

こんにちは。これから福島県立船引高等学校の発表をさせていただきます。私は船引高校でPTA会長をやっております橋本芳和と申します。よろしくお願いたします。

まず学校紹介から行きます。本校は福島県の中央より東、阿武隈山地にある田村市というところに位置してまして、日本三大鍾乳洞ってのがあり、その中の一つの阿武隈鍾乳洞というところの地域に、自然に囲まれた、支援学校さんと校舎を一緒にしている高校になります。創立は昭和23年にさかのぼりまして、今年で77周年を迎える全校生徒204名の小さな高校です。

校訓は「自立」を掲げていて、自ら律して行動することを目標に、高校の特色としてまず進学を目的とした進学コース。県内で先駆けて導入して、企業で働くことで授業の単位と同じものを習得可能なデュアルコース。そして一般教養、資格取得を中心として学ぶビジネスコースを設けており、2年次からこちらの選択によって自分の進路を決めていきます。



特に、この本校の特色でもあるデュアルコースですが、生徒は週に2回ほど希望した職種に2年次は前期と後期、3年次は年間を通じて働きながら学んで、職業人を育てる人材育成システムを行っております。学校では社会に出るための基礎学力を養い、企業では実践を通して専門的な知識・技能を磨くとともに、社会人としての意識を養成していきます。

そして私たちPTAの活動ですが、4月に入学式をへて、前年度の活動報告をもとに本年度の活動を開始します。本来、総務委員会、進路対策、健全育成、調査広報と4分科会に分かれておりますが、本校では人が少ないので、総務委員会の中に進路対策、健全育成をまとめてひとくくりとして、調査広報と大きく2つに分類させております。

7月と11月の各3日間。これは、衣替えの時期に保護者が中心となって朝のあいさつ運動を実施して、8月には市内を流れる大滝根川河川敷で行われる灯籠流し、花火大会の祭礼巡回指導、そして9月には学校美化という目的の下、PTAの皆さんが奉仕作業に従事しております。なお広報会報誌については年2回、発行させていただいて、夏は新入生中心、冬は卒業生中心に内容を吟味しております。また、平成29年から生徒たちが活動しているアクティブラーダープロジェクトに私たち保護者も参加し、地域課題に取り組んでおります。



このアクティブラーダープロジェクトですが、正式名称が『地域復興～船高アクティブラーダー育成プロジェクト～』といたしまして、福島県教育委員会主体のもと、子どもがふみだす福島復興体験応援事業の一環として県内の数校で行われている事業となります。本プロジェ



クトの狙いは、生徒たちが東日本大震災原発事故の影響で避難を余儀なくされた人たちとの交流を通じて、過去、現在、未来を知って、聞いて、見て、まとめて、その知識、経験を他県の同世代の人に伝え、自分たちの考えを深め、資質、能力を育てる事業になります。この活動を通じて地域のリーダーに育ってくれば素晴らしいことだと思っております。

ここでアクティブリーダープロジェクトについて簡単にご説明させていただきます。まず活動

テーマ。アクティブに行動、地域貢献を掲げ、一人一人が地域のために何ができるかを考えて、過去の災害を知り、地域の防災を考えるきっかけを作って、福島の過去から未来に向かう最先端技術を見学して、可能性の大きさを自分自身で感じて、地域防災行事に参加し、高校生が今できる防災について考える防災班と、地域を知るためにイベントに参加して、自分たちができる地域の活性化について考えるイベント班を設置し、そのイベントに参加して地域の魅力を発信するために地域の方々との交流を深め、効率的な方法を形にするPR班とがあります。そのために生徒たちはボランティアに積極的に参加し、祭礼等のお手伝いをし、地域の美化活動に協力して地域の方と交流を図り親睦を深めております。



また、この活動を他方面の方に知っていただくように、震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部交流会というものがありまして、そちらの交流会に参加して、この活動を理解していただけるよう外部発信も行っております。このプロジェクトを通じて、大学等で地域の復興をより深く学びたい者や、地域に貢献できる仕事がしたいという者が現れております。私たちPTAもその中に混ざっております。

次に、今回、入学者の減少と高校再編によりまして、本年度をもちまして私どもの船引高校は隣町にあります小野高校さんとそれぞれ閉校することになりました。それで来年度から2校が統合の上、あぶくま^{はくほう}柏鵬高校。柏鵬といっても相撲取りじゃないんですけど、「柏鵬」って書きます、こういう高校としてスタートします。

一応、系列としてはこの感じでいくのですが、特色としては、自分たちで授業の割り振りを決めて、自分で時間割を設定する総合学科の学校になります。それを通じて、総合に対して、地域の思考創意、優位性、地域性を主張する方々が、要はおじいちゃん、おばあちゃん方の意見が強かったもので、そういうことがいろいろありましたが、伝統と文化の特色を生かしながら、過去に捉われない新たな発想で未来をつないでいけるよう子どもたちに期待をしております。問題点ということで多々あるんですが、時間も時間になってしまいましたので、詳しくは要項を見ていただくと大変、助かります。

結びになりますが、私、10年間PTA活動をさせていただいて、いろいろな方と交流を深め



させていただいて、いろいろな方とお話をさせていただく機会を設けさせていただきました。こういう出会いを作っていただいて皆さんにとっても感謝を申し上げます。どうもありがとうございます。これにて発表を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

地域とつながり子どもたちと歩むPTA活動 ～コロナ禍からの再出発・新たな取り組み～



宮城県名取北高等学校

PTA会長 佐藤美香



皆さん、こんにちは。宮城県名取北高等学校PTA会長の佐藤美香です。今日は名取北高校のPTA活動についてお話をさせていただきます。

本校も皆さんの学校と同様に、本部役員として会長、副会長、会計、幹事、各学年の委員長、副委員長で構成し、本部役員が中心となり、PTA活動の各委員会、健全育成委員会、進路対策委員会、調査広報委員会の計画や運営を行っております。

しかし、全国的に新型コロナウイルスの感染拡大により約3年間の間、学校行事やPTA活動は中止や規模の縮小などの処置を取らなければなりません。そして本校もPTA活動は、ほぼ休止状態になりました。ようやく令和5年5月から5類感染症となり、徐々に活動に関する制限も緩やかになり、さまざまな活動が再開されるようになりました。しかしこの3年間で以前の活動を知っている者がいなくなっていました。そこで、役員会ではまずPTAとして何ができるのかという検討から始まったのです。

私自身は幼稚園、小学校、中学校とPTA役員として活動した経験がありましたが、今回、高校で初めて一から出発することを体験しました。最初に取り組んだ大きな行事として、文化祭への参加を決めました。以前は餅つきなどを行っていましたが、われわれが無理なくできることからスタートしようということで、喫茶コーナーとして参加しました。PTAの方々がたくさん参加して、きれいに飾り付けをしてくださり、昨年度は飲み物とパンを販売し、大好評で、午前中に完売するほどでした。売上は、文化祭の1日目に打ち上げられる花火代の一部として寄付しました。PTAとして参加して、生徒たちの普段の学校生活の様子や、生徒の笑顔などを見ることができて、喜びと充実を得ることができました。

この経験からさらにPTAとしてできることはないだろうか検討しました。生徒とともに活動がしたい、学校内での活動だけではなく地域との関わりを大切にしたい、という意見があり、ボランティアに参加してみてもどうかということになりました。大人になってから町内会等の生活に関わる以外の活動は、子育てする上でいい経験、そして勉強になると考えたからです。



そこでまず生徒が以前から参加しているボランティアに、PTAも参加させてもらうことになりました。新たな取り組みの一つ目として、東北宮城復興マラソンのエイドスタッフボランティアの参加です。この大会は、東日本大震災からの復興への思いを持った多くのランナーが集う東北最大級のマラソン大会です。

昨年度は本校から生徒、PTA役員、教員の総勢67名がボランティアとして参加しました。エイドステーションではランナーの皆さんに、



バナナやスポーツドリンクを配布する係を担当しました。ランナーの方々が東日本大震災から復興した宮城の地を走る姿に、私たちも心を動かされ、感謝の気持ちを込めて活動に取り組みました。特にランナーからの「ありがとう」という言葉に励まされ、復興の力強さと人と人とのつながりの大切をあらためて実感しました。

2つ目が、名取市海岸林再生事業ボランティア参加です。公益財団法人オイスカが行っている東日本大震災の津波でなぎ倒された松林の再生事業に参加しました。生徒、PTA役員、会員の総勢27名で取り組みました。

活動当日は、海岸にクロマツが植えられた経緯やその役割について説明があり、クロマツの存在の大切さを知りました。私たちは単に作業を行うのではなく、こうした背景や目的を理解した上で取り組むことの大切さを学びました。説明の後、参加者は手袋やノコギリを手に取り、クロマツの本数調整伐採作業を開始しました。参加者は、慎重に1本ずつ確認しながら作業を進め、未来の防災林の姿を想像しながら汗を流しました。

今回の活動は地域社会とのつながりや、震災復興の歩みを実感する貴重な機会となりました。地域と学校、家庭の連携の大切さをあらためて感じる事ができました。このような活動は私たち大人と子どもたちがお互いに思いやりをもって接することで、子どもたちが普段の学校生活では得られない学びを体験するだけではなく、私たち大人自身も学びや気付きの多い貴重な経験となりました。このような活動を通じて、子どもたちにとって地域が自分の居場所だと感じられるような温かいつながりを育てていけたらと思っています。今後も地域と学校が連携しながら、子どもたちの成長を支える環境づくりに積極的に関わっていけたらと考えております。またPTAとして、子どもたちと一緒に地域に関わる活動を継続していけるよう力を合わせて取り組んでまいります。



余談ですが、今日も楽天球場にてロッテ対楽天の試合があります。今日の楽天の先発投手は、今回の私の発表に合わせたかのように、本校名取北高校出身の岸投手です。併せて応援のほうもよろしく申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

コーディネーター（三塚）：

ありがとうございました。後ほど、会場の皆さんの方から質問等も受け付けたいと思いますけれども、まず私の方から2、3だけ先に質問させていただきます。

中村会長さん、役員を選出方法を変えたということで、会員の皆さんからの反響なり、どうなんでしょうか。うまくスムーズにしているということよろしいでしょうか。

青森県立三本木高等学校 P T A会長・中村聖吾：

私はそう感じております。この3年のうちに1年だけやっていただきたいということなので、ちょっと心配事とすると、1年やればこの2年やらなくてもいいと。そうなると、全くゼロのベースで次の年度の委員会が立ち上がるので、そうなると経験者がいないというのがちょっと心配だったのですが、結局、ふたを開けてみると、1学年、経験すると、また私、2年生も3年生もやってもいいですよという、楽しいと思っただけの方がいまして、委員会ごとに5、6名は次年度もやってもいいですよという。なので、スムーズに継続されている印象はあります。



コーディネーター（三塚）：

続きまして、佐沢会長さん、広報誌最優秀賞ということで、何度もということは、何か編集やその他コツがあるんでしょうか。

学校法人和洋学園秋田令和高等学校 前 P T A会長・佐沢かな子：

私が思うコツとしては、お母さんたちが主に作っているのですが、お母さんたちが行事に参加して、子どもたちのいい笑顔の瞬間をたくさんの写真に収めるということで、材料がたくさんあるということです。あと、構成とかもお母さんたちが何回も集まって意見を出し合っただけで決めますので、それをそのまま形にしてくれる印刷会社さんもととても優秀なんだと思います。

コーディネーター（三塚）：

ありがとうございます。もうおひと方。山形北の熊谷会長さん。Tシャツの効果は抜群ですか。

山形県立山形北高等学校 P T A会長・熊谷晃一：

すごいです。言葉では言い表せないくらい。もう、ザーッと。ちょっと逆光で見えないですけど。

コーディネーター（三塚）：

ということだそうですので、皆さんも参考にいただければと思います。会場の方から質問を受け付けたいと思いますけれども、挙手いただけますでしょうか。質問ある方。よろしいですか。マイクよろしいですか。

それではまた、もしあれば時間を見て質問を受け付けたいと思います。それでは、野澤先生の方から講評をいただいてまとめていただきたいと思いますので、よろしくお願ひします。



指導助言



宮城教育大学元特任教授
現「リフノス」センター長
野澤 令 照

本当に今日は大変ありがとうございました。各県の代表ということで今、各会長さん、先生方からご発表いただきましたが、ご来場の皆さま方もそれぞれの事例をお聞きいただいて、すぐここは利用、活用できるとか、参考になったということ、たくさんおありだったのではないかと思います。本当に貴重な発表をありがとうございました。

あまり時間はないのですが、私の方から、私なりに感じたことについて少しお話をさせていただければなと思っておりました。

まず一番バッターで、三本木高等学校の中村会長さんのお話を伺いながら、非常に興味深かったのが、森林学習を支えるというフォレスト委員会というのでしょうか。こちらが「夢と生命の森」ということで、時代を生きる子どもたちにとっては大変、大切な活動というか、学習だろうと思うのですが。それに対して積極的にPTAの皆さま方もご協力をなさっているということ、非常に特徴ある取り組みではないかと思いました。

さらには中高が合同で取り組んでいるということですか。これは、やはり高校生の姿を見て、中学生が、自分たちが次にやるのが、ある目標が見えてくるという、そういう効果が非常に高いのではないのかということを感じました。

それから今、三塚先生からもありましたけど、やはり委員の選出方法ですね。これを大変、工夫されて、それが、非常に効果が上がっているということ。これは多くのPTAの皆さま方にとって大変、参考になる事例ではないかと思っております。どうしても委員選考って、どこでも苦労されていると思いますので、そういった点では一つの示唆を与えていただけたかと思ったところではあります。

次に、宮古北高等学校の藤倉先生のお話、大変ありがとうございました。お話の中にもありましたが、小規模校であるということを手返して言ったら変ですけども、非常に有効に取り組まれているという姿。中でもやはり、オリンピアという取り組みですかね。それから文化祭でしょうか。非常に特徴のある取り組みをなさっていただいているということを感じていたところではありますけれども、子どもたちの写真から見る笑顔ですね、非常に楽しそうに活動しているというのが印象に残ったところです。それから先生方も保護者の方も生徒たちも、一体となって取り組んでいるというその姿、やはり一つの理想の形がここで体現されているのかなというふう感じたところではあります。

それから、3番目にご発表いただきました令和高等学校の佐沢会長さん、ありがとうございました。お話の中でやはり非常に響いたのが、子どもたちの成長をしっかり見守ることができるんだというようなこととか、それから保護者の方々同士のつながりが生まれてくるとか、さらには保護者の方々が楽しんでいるということですかね。そういったことが、やはりPTA活動がうまく回っていく、成功していく一つの大きな要因になっているのかと思いますし、先生方と一緒に楽しめているという姿ですか、この辺もやはり非常に特徴的だと思います。それで、先生方もずっと転勤がなくていらっしゃるというのも、一つの要因なのかと考えたところではあります。大変ありがとうございました。

それから、山形北高校の熊谷会長さん。Tシャツ、お似合いですね。ありがとうございます。素敵だなと思っておりましたが、やはり学校行事への参加というのでしょうか、それを通して先

生方とか子どもたちと一緒にPTAの会員の皆さまがいろいろ経験をされている。その中で実は非常に貴重だと思ったのは、ただ成功することだけではなくて、試行錯誤を繰り返しながら、そして苦労を重ねながらというところが多分おありなのだろうと思いますが、そこを取り組んでいらっしゃるっていうこと。よく事例という、成功した部分だけしか取り沙汰されないことがあるのですが、こういったやはり苦労されているところなどもお聞かせいただくと大変、参考になるなと思って伺っておりました。さらに、メリットやデメリットというものを正しく認識をされた上で、特に強調されていらっしゃるいましたが、負担感であるとか、やらされ感であるとか、そういったものを払拭してこうとされている姿ですか、それがやはり活動を順調に動かしていくといえますか、進めていく上で非常に貴重な取り組みではないのかと思っておりました。やはりみんなで少しずつという、負担感を減らすというふうな取り組みというものは、非常に大きなポイントになるのかというふうに感じて聞かせていただきました。

それから、福島の船引高等学校さんでよろしいですかね。橋本会長さんのお話ですが、地域復興アクティブラーダープロジェクトがございしますが、非常に特徴的な取り組みだと思いますし、これは生徒たちにとっても非常に貴重な経験だと思うのですが、やはり会員の皆さまが、PTAの方々が積極的に参加されているっていうこと、こういったところがやはり非常に貴重だといえますか、参考になる取り組みだと思っていたところ。それから生徒さんたちが防災であるとか、地域の活性化であるとか、そういったものに積極的に取り組むという姿を、保護者の方たち、PTAの方々たちが支えているっていうこと、これがやはり子どもも大人も一緒にその未来につながっていくという意味で、非常に大きな力になっていくのではないのかというふうに聞かせていただきました。ありがとうございます。

最後に、名取北高校の佐藤会長さんのお話でございます。岸投手の出身校ということで、今日頑張ってくれるんじゃないかと思えますけれども、ありがとうございます。事業の中で、東北宮城復興マラソンのエイドステーションのボランティアスタッフでありますとか、名取の海岸の再生事業ですか、こういったボランティアに積極的に取り組んでいるということ、今日は東北ということで、東日本大震災で、被害を、被災を受けた地域の方々からのお話が複数ございましたけれども、そういった意味でもやはり大きな力、子どもたちにとっても経験になるのかなと思っています。やはり共通して感じるのは、生徒たちが大変、笑顔で取り組んでいるということ、普段の学校生活の中ではなかなか経験できないことを、そこで学ぶことができるというようなこと、さらには大人の人たちにとっても学び、あるいは、気づきというものが、そこにしっかりあるんだなというようなこと、そんなことを感じたところでございます。これまた大変、参考になる事例ではなかったかと思ったところでございます。

今、6つの事例をご発表いただきましたが、会場の皆さまもきっとお気づきになっていらっしゃるのではないかと思います。やはり共通したところがあると私自身、感じて伺っておりました。

まずは、無理をしないこと。そして、楽しく活動すること。そして、柔軟に対応すること。柔らかいつながりという言葉もありましたが、これもやはりPTA活動を続けていく上で、そして苦労はあるのでしょけれども、それをつないでいく、継続していく上で非常に大きなポイントになっていくのかなというようなことを感じました。

先ほどもありましたけれども、やはりやらされ感があったり、ねばならない、ということになりますと、どんどん苦しくなってしまう、だんだん活動から離れていってしまうということがあろうかと思いますが、そういったことを避けていくということが一つ大きいのかと感じます。それからもう一つ、やはり感じたことが、子どもたちもそうですし、PTAの会員の皆さんもそうですけど、楽しいということにつながりますけれど、笑顔がそこにあるということですかね、その力がやはり非常に大きいということを感じたところでした。やはり笑顔にいるとき、嫌なこととはそこからは出てこない、みんなで楽しく笑いながら何かができるっていうことを求めている



くということの大切さということを感じさせていただきました。

それからもうひとつは、やはり子どもたちが成長する姿が見られるということ、それと同時にPTAの活動、あるいは会員の皆さまご自身が、やはりやって良かったという達成感を感じられること、それがやはりどの取り組みにも共通していたような気がしております。これも大きなポイントになるのではないかと感じていたところでした。



やはり、子どもたちの応援団という言葉がありましたけれども、親として、PTAとして、子どもを支えるというその本来の大きな目的に迫っていく取り組みが多かったというふうに思いました。そして、親の姿を見て子どもが育っていく、会長さん方の一生懸命頑張っているその姿を子どもさんが見て、おやじさん、なかなかやるじゃんというお話が今日どこかであったと思いますが、それってすごいことだなと思うんですね。よく昔から親の背中、大人の背中を見て子どもが育つといいですけど、あるときから背中じゃなくておなかを見せて育っていいじゃないか、みたいな話もありますが。でも大人が楽しんでいる、そして生き生きとそこで活動している、笑顔にあふれている、その姿を見れば子どもたちだって同じように生きていきたい、こんな大人になりたい、そんなふうに思っていくのだろうというふうに思いますし、将来、子どもさんたちがわが子を持ったときに、PTAという取り組みをやってみようという思いも、そこにつながっていくのかというようなことを感じていたところでございました。

それでここから先は、今日会場にいらっしゃる皆さま方に、私からメッセージを少し伝えさせていただきたいと思っております。お時間を頂戴できればと思っておりますが、よろしく願いをいたします。

これはもう言わずもがなというか、釈迦に説法になりますけれども、PTAは、やはり実は最大の社会教育団体であると。日本の教育に大きな影響力を持てる団体なんだという、その存在の価値の大きさというのは間違いなくあるということ、そのことをぜひもう一度、確認をし合うということが大事ではないかと思っておりますし、学校も家庭も地域もつなぐ、その大きな力を発揮するのが、やはりPTAなのだということも、これも間違いのないことではないかと思っております。

それでPTAの目的でございますけれども、これも皆さんご存じのとおり、ご案内のとおりですが、ここにありますように子どもたちが健やかに育つこと、それを最大の目標に掲げていきます。でも、そこだけではなくて、先ほど来、事例の中でもたくさんご発表いただきましたけれども、関わっている会員の方々、親御さんたちが、ご自身たちの学びになったり、そして自分自身の生活を豊かにしたり、そういったことにもつながっていくというのがPTAが持っている目的ではないのかというふうに思っているところです。

ところが、今日ご参会の皆さまは本当に各地域でご活躍の皆さまですから、こんなことはないでしょうけれども、残念ながら今はPTAを取り巻く環境が非常に厳しいところがございます。これはご理解いただいているとおりだと思うんですけども。例えばPTAにやはり逆風が吹いているということは、間違いなく言えるのではないかなと私自身は考えておりました。

その中で、いろんな意味で言葉が出てきます。役員の成り手がいなかったり、という。きょうは解決策にいろいろヒントをいただきましたけれど、忙しいのに無理やり参加させられるのは嫌だとか、それから本当に子どものためになっているのかどうか分からないとか、そんな言葉が出てきたり、そしてPTAって任意団体だよねってというようなこと、これも多く取り沙汰されますよね。そして役員が負担。これは解決策がありましたけれど、そういったものが多くて逆風が吹いているというのが全国、多くの地域の実情ではないかと思うんですね。

ちょっと私自身も驚くようなこともございました。一つ、PTAは任意加入なのに、全員参加の雰囲気があるのが働く女性にとって重荷になっているということをおっしゃった方がいた。昔ですけれども。それに付随しまして、これもご存じだと思いますが、熊本のPTA裁判、2014年にありましたけれども。これは実は強制加入をさせられてという方が訴えて、そして被告とし

てPTA側になって。でも、それは二審で和解をしたのですが、そのときの条件が、実は任意加入であるということを確認をしたという経緯があるんですね。その頃から実は、任意加入うんぬんというものが広がってきていたというところがありました。

一方で実は、私は義務の教員だったものですから、義務のほうのPTA経験をしておりますけれども、この中でよく話題になりましたのが、PTAから費用を出して子どもたちにさまざまな記念品をおあげします。例えば卒業式のときの筒であったり、というのをあげますよね。ところがPTAは任意加入だから加入していないという子どもさんに対して、PTAとして筋から言えばお金、払ってないんだからやなくていいじゃないか、というふうな過激な話も出ますけれど、結論として目の前にいる子どもに教育的な配慮だということで、それを出すということになってきます。ちょっとそこに矛盾を感じるということも実はございました。

私は、これは、今はもう給食費は無償化しておりますが、それに類似したようなことをうそぶいたというニュース報道を、私は見たときがあって。それは何かというと、給食費なんか払わなくていいんだって、学校は必ずお金を払わなくて食べさせてくれるから。さっきのPTAの話と一緒にですね。教育的配慮に守られている。それを見てさすがに全国的に、おいおい、それは何だよってということが広がったという経緯が実はございました。

そういった中であって、PTA活動をこれからしっかりと持続をし、そして発展をさせていくためには、私たちは何をしなければならないかということは、考えていかなければならないのではないかと考えております。

それで、PTAに対する思い、今日もたくさん皆さんから伺いました。やはり学校の活動にしっかりと意見を言って、先生方と一緒にいろんな教育をつくれるのは、PTAの持っている力なんだということとか、それから子育てに関する情報をいろいろな方々から得ることができて、一人で子育てをするんじゃなくて、みんなで子育てができるという、そういう大きなメリットが、そこから生まれてくるということがございます。それから先生と密につながることで、そうするとやはりなかなか言えないことも、先生方からも本音で聞くことができる。わが子についてのことも聞けるというのは、非常に親にとって大きな力ではないのかと思っております。

そういった中から、私がやはり大事だと思いますのは、今日いらっしゃる皆さま方にぜひお願いしたいと思うのは、なかなかこういったPTAの本来の意義であるとか、そういった価値を理解いただけない方々に、繰り返し伝えていただくということが大事なような気がしていますし、それをぜひお願いしたいと思うのです。その意義として3つに少し整理をしてみました。

1つが、やはり学びの場というものがそこで生まれる。これも繰り返しになります。ご発表の中にもありましたけれども、会員の方ご自身が自分自身を高めていくという、そういう機会ができてくるということ、さらには地域自体を豊かにしていくための、そういった力にもなっていくということが、PTAの活動の中には含まれているんだということがあろうかと思えます。



それから2つ目としては、やはりつながり作りということがあろうかと思えます。先ほど来のお話にもありましたいろいろなネットワークができます。人と関わることによって、高校の場合は、特に小・中と違って広い地域の方々、これまで出会わなかった方々との出会いがあるというお話ございましたけれども、そういったつながりが生まれていく中で、一緒に子どもを育てるといった取り組み。そこに幅広いさまざまな活動が生まれてくるという意味でのメリットというものがあろうかと思えます。

それから3つ目としては、やはりパートナーシップ。親御さんと先生方と、さらには地域の方々とのつながり。それをしっかりと作っていく。その母体になっていくのは、やはりPTAの活動だろうと思っています。

そうすると、先生方とつながることで、学校の中でわが子の様子というのが見えてきますし、知り合いの方が増えてくれば、お互い同士の子どもと一緒にいることができるようになって、集

団の中のわが子の立ち位置というのも見えてくる。これはわが子しか見てない親御さんには、なかなかできないことだろうと、私はそういうふうに思っています。客観的にわが子を見れるようになるというようなこと、それは非常に大きなものではないかと思えます。

最後に、やはり保護者の皆さん同士がつながれるという、PTA活動を通して、特に役員なんかを務められた方は、一生の友達がそこでできたというお話をよく伺います。これもご自身にとっての貴重な財産になっていくのだろうというようなことを感じています。こういったPTA活動の意義。これが今、国を挙げて社会全体で子どもを育てようという社会総がかりの教育、それを実現しようと国も全国で取り組んでいるわけですが、そういったものが具現化できる大きな力になっていくのだろうと、それがPTAの意義ではないかと思っております。

そのPTAの活動の可能性ということで、2つほどちょっと紹介をさせていただきたいと思えます。今、本当に時代が大きく変わり、教育の在り様も大きく変わらなければならないところまで来ている。我々には先が見えないところに、今あります。5年前にこれほど生成AIが席卷するとは、ほとんどの人は思っていなかったのではないのでしょうか。

今、私もちょっと大学に勤務したときがありますけれど、大学の教員が一番、困っておりました。卒業論文を書くときに、学生にわざわざ一言、言うわけですね。論文は自分の手で書くように。AIに書かせないようにと暗に言ってるわけですが、生成AIに書かせた方が、はるかに質の高い論文が出来上がってしまうという時代なのですね。果たしてそれがこれからの社会を、そして本当にその教育の在り様を、どう考えていったらいいかということは、みんなが考えていかなきゃいけない。そういったときにやはりこうしたPTAの皆さんの活動というものが、それを支える大きな力になっていくということは間違いないと思っております。

さらには、やはりPTAの活動をする、そして取り組まれていることが、いろいろな地域におけるさまざまな団体とのつながりができてきます。人とのつながりも増えます。ネットワークも非常に手厚いものができてきます。そういったことによって地域社会の中で、皆さんご自身が地域づくりのリーダーとして、さらにご活躍をいただくという場が出てくるかと思えます。

私はもともと仙台市で活動していたのですが、今、仙台市の中で地域の中でリーダーとしてさまざまな活動を支えていらっしゃる方々、多くの方々は、実はPTAの役員を経験された方であるとか、そういった活動をやってこられた方が、今、地域に戻られて、子どもたちが大きくなってますからPTAは卒業していますけれど、その方たちがやはりPTA時代に、役員時代に培った力を今、発揮していただいているということが間違いないとある。そういった意味で、やはり地域のリーダーとして活躍できる方々が、ここから生まれていくんだろうということは感じています。

同時に、これは繰り返しになりますけれど、皆さんの活動を子どもたちはちゃんと見ています。そうするとやはり町づくりに、地域づくりに意識を持つ、そういった子どもたちが育ってくるということは、将来、社会のために役になることに何かをやりたいとか、そんなことを目指したいというような子どもが必ずそこから育ってくる。そういった可能性を私はPTAというのは持っているのではないかと感じているわけです。

ですから、繰り返しになります。今日おいでいただいた皆さま方は、ぜひ一人でも多くの方々にPTAって楽しいんだよ。みんなで一緒にやろうよ、こんな良さがあるよ、ということを伝えていただいて、多くの人たちを巻き込んでいただきたいと思いますというふうに思っているところでございます。

今日は本当に、私自身もたくさんの学びをいただきました。ぜひ今後、私自身も、さまざまな場で生かさせていただきたいと思っておりますけれども、やはり先ほど佐沢会長さんがおっしゃった一言が胸に響いております、「PTAは永遠に不滅です」、これを皆さんで合言葉にして、ぜひPTA活動をこれからも盛んになっていくように取り組んでいただけたらと思っております。長くなりましたがよろしくお願いたします。



閉会行事

次期開催県あいさつ

秋田県高等学校PTA連合会
会長 菊地 佐起子

皆さんこんにちは。次期開催県秋田県の県連会長をしております菊地と申します。よろしくお願ひします。今日は、秋田PRキャプテン「んだッチ」にも来ていただきました。はい、「んだッチ」で～～す。秋田弁で、んだ、んだ、というのが、そうそう、という意味なので、「んだ」「んだ」を覚えてください。「んだッチ」くん、こう見えても、ロボットの子どもです。



宮城県の稲垣会長はじめ滝口実行委員長、そして仙台大会の開催にあられた宮城県高等学校PTA連合会の皆様、お疲れ様でした。昨日の情報交換会に始まり、本日の仙台大会の講演、発表など、参加させていただいた私たちにとって、大変有意義な二日間となりました。心より感謝申しあげます。「はやぶさ2」プロジェクトのお話をいただいた川口先生のご講演は、大きな事業を成し遂げる組織の秘訣を改めて考えることができたお話でした。私たちのPTA活動にもつながることが多く、これからの活動に生かしていきたいと思ひます。

高校生の皆さんによるアトラクションも私たちに大きな感動を与えてくれました。「んだッチ」も、アトラクションどうだった？ よかったねえ。ちょっとハラハラドキドキしながら、楽しかったですよね。ねえねえ「んだッチ」、朝と午前中いた？ いなかったよね。どこに行ってきたの？ ベニールランドに遊びにいったの？ そうだね、ごめんごめん、遊びに行ってきたのではないんです、観光しに行ったんです。秋田の観光PRキャプテンですから、他の観光を見ながらやらないと、秋田の良いところもPRできないんだなと、そうですね。「んだッチ」、秋田県の職員ですからお仕事をしにきたということ。

こちらへんで、来年度行われます秋田県の案内を、金子宗元副会長からさせていただきます。

秋田県高等学校PTA連合会 副会長 金子 宗元：

皆さん、お残りいただきましてありがとうございます。来年、令和8年度秋田大会ですけれども、令和8年7月9日木曜日、7月10日金曜日に、秋田市にございます「秋田芸術劇場ミルハス」にて開催をさせていただきたいと準備しております。例年、梅雨の終わりの大変暑い時期に開催しておりますけれども、暑さに負けることなく、秋田の美味しい食べ物と自慢のお酒で皆様をお迎えしたいと準備をさせていただいているところであります。歴史と文化、自然の豊かな美の国秋田におきまして、東北地区高等学校PTAの現在と未来、地域と私たちの子どもの未来について語り明かしましょう。来年のお越しを心よりお待ち申しあげます。

秋田県高等学校PTA連合会 会長 菊地 佐起子：

ねえねえ、「んだッチ」、今日もいっぱい人いるよね。秋田もいっぱいの人に、来てもらいたいよね。皆さん、来年、秋田に来てくれますか～。（拍手） では、もう一回いきます。

皆さん、秋田に来てくれますか～。（拍手） ありがとうございます。それでは、皆さん、来年は秋田でお待ちしております。皆さん、ぜひ、来てください。

秋田弁で、「では、さようなら」を「へ・ば・な」と言ひます。皆さん、ぜひ来てくださいね。皆さまへ・ば・な～。（会場） へ・ば・な～～～



第74回東北地区高等学校PTA連合会 仙台大会 参加者数

(1) 大会参加者数（7月2日・仙台サンプラザホール）

区分	県名等	参加者数	受賞者（内数）	運営委員（内数）	備考
一般参加	青森	127	3		
	岩手	214	6		
	秋田	58	7		
	山形	92	4		
	福島	82	3		
	宮城	410	5	263	運営委員含む
	小計	983	28	263	
その他	来賓等	14			全国会長含む
	講師	1			
	総合司会	1			
	コーディネーター	1			
	指導助言	1			
	看護スタッフ	2		2	外部に依頼
	生徒発表	59			
	大河原産業	25			生徒22 + 引率3
	仙台育英	34			生徒32 + 引率2
	その他	4			全国大学生協連
	小計	83			
合計		1,066	28	265	

(2) 情報交換会参加者数（7月1日・仙台サンプラザホテル）

区分	県名等	参加者数	運営委員（内数）	備考
一般参加	青森	98		
	岩手	77		
	秋田	39		
	山形	45		
	福島	42		
	宮城	98	45	運営委員含む
	小計	399	45	
その他	来賓等	12		全国会長含む
	アトラクション	14		宮城大学すずめ踊りサークル「娘すずめ。」
	その他	3		全国大学生協連
	小計	29		
合計		428	45	

(3) 総計 1,080名（情報交換会アトラクション出演者含む）

編集後記



宮城県高P連会長（泉高等学校PTA会長） 稲垣 美樹

仙台大会から季節はひとつ進み、朝夕には秋の気配が感じられる頃となりました。

7月の猛暑の中、東北各地より多くの皆さまにご参集いただき、無事に大会を開催できましたこと、心より御礼申し上げます。

運営にあたり、不慣れな点や行き届かぬ部分もあったかと思いますが、温かいご理解とご協力により、最後まで滞りなく終えることができました。本当にありがとうございました。

皆さまの笑顔と熱意に触れ、私自身、多くの励ましと勇気をいただく時間となりました。今回の出会いや学びが、今後それぞれの地域や学校での活動の一助となれば、大変嬉しく思います。そして皆さまの日々の取り組みが、穏やかで実り多いものとなりますよう、心より願っております。

最後になりますが、ご参加くださった皆さま、運営に尽力くださった全ての関係者の皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。そして、事務局の佐藤さん、伏見さんに、心からの感謝とスペシャルサンクスを！本当にありがとうございました！

塩釜高等学校PTA会長 中 静 洋子

第74回東北地区高等学校PTA連合会仙台大会が成功裏に終わり、このたび大会報告書を発行するのはこびとなりました。大会報告書を無事皆様のお手元にお届けできますことを感謝申し上げますとともに、多くの皆様にお読みいただけますことを心より願っております。

さて、本大会は昨年度より準備を進めてまいりました。大会を通じて何よりの収穫は、出席された子育て中の親同士が互いに貴重な生の声を伝え合うことができた点です。親自身が互いにたくさんの学びを得ることができ、「そうだね」と情報を分かち合い、それぞれの行動の励みになったことは計り知れない喜びであり、大変良い機会になりました。

各種研修等とおして、スナップ写真の撮影等にご協力いただいた皆様には、改めて感謝を申し上げます。また、本大会の運営に携われたという思いを胸に、これからも「楽しい」、「ためになる」をモットーに、PTA活動に取り組んでいきたいという思いを新たにいたしました。本当にありがとうございました。

塩釜高等学校PTA事務局長 大 槻 賢 一

東北各地から大勢のお客様を仙台の地にお迎えし、第74回東北地区高等学校PTA連合会仙台大会が、新たな気づきと希望を与えてくれたこと、また本大会に役員として携わり貴重な経験をさせていただきましたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

本大会では記録の係を務め、役員の方々をはじめ参加者の皆様の生き生きとした表情にふれることで、心が洗われる思いでした。

また、大会報告書の編集にあたり、写真の選定を行いました。一枚一枚の写真からは、参加された皆様のみなぎるパワーとPTA活動をよりよいものにしたという思いが伝わってきました。

報告書では、御覧になられる方々にそうした大会の活気ある雰囲気をお伝えできればと願っております。そして、今後開催される東北地区のPTA大会が一段と輝かしいものとなり、また、県を越えた結びつきから学び得たことを、互いにこれからのPTA活動に生かすことができればと思っております。

最後になりますが、本報告書の編集にあたり、細部にわたり御助力くださった、宮城県高等学校PTA連合会事務局事務局長の佐藤 誠 様と伏見 裕子 様には、心より感謝を申し上げます。

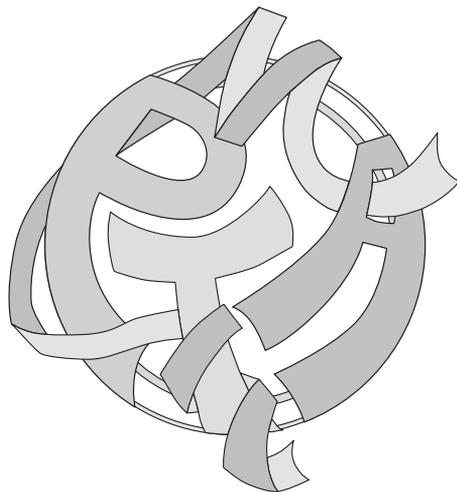
仙山西高等学校PTA会長 松野 大二郎（事務局 阿部 通子）

令和5年度に開催された「全国高P連大会2023宮城大会」を無事に終え、ホッとしたのも束の間、「東北高P連仙台大会」の準備が始まりました。今回、仙山西高は実行委員として「記録部会」を担当し、運営に携わりました。例年と異なる週の半ばの開催となりましたが、東北6県から来仙された多くの参加者が集う会場では、皆さんの活発な交流の場にふさわしく、明るくにぎやかな雰囲気を感じることができました。



前日の会場準備、情報交換会、そして大会当日の全てのプログラムを通して、同じく記録担当にあたった塩釜高校PTAの皆さんと和気藹々、楽しく気兼ねなく仕事をさせていただいたことも得がたい貴重な機会となりました。今後も互いのPTA活動等について情報交換をしながら、皆さんと協力して宮城県高P連の活動がより一層充実したものになるよう務めていきたいと思っております。ありがとうございました。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 宮城県高P連マーク ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇



P.T.A を宮城の頭文字 M が結びつけています。

第74回東北地区高等学校 P T A 連合会仙台大会報告書

編集 第74回東北地区高等学校 P T A 連合会
仙台大会事務局
〒 983-0836 仙台市宮城野区幸町 4-5-1
宮城県青年会館内
TEL / 022-299-4621 FAX / 352-0538
E-mail / miyagikopren@ia2.itkeeper.ne.jp

印刷 創文印刷出版株式会社
〒 980-0821 仙台市青葉区春日町 8-34
TEL / 022-222-0181 FAX / 022-266-4246

